Annual Activity Report 2023

Fieldwork : Toward Social Coexistence

龍谷大学 社会学部
2023 年度 社会共生実習 活動報告書

目次

ご　あ　い　さ　つ.....1

地域エンパワねっと・大津中央.....2

多文化共生のコミュニティ・デザイン～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～.. 13

コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト..... 26

農福連携で地域をつなぐ－「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」..... 42

お寺の可能性を引き出そう－社会におけるお寺の役割を考える－..... 51

いくつになっても、出かけられる！～高齢者を元気にする介護ツアー企画～..... 67

障がいをもつ子どもたちの放課後支援..... 73

自治体を PR してみる！..... 78

発信情報..... 81

ご　あ　い　さ　つ

2023 年度 社会共生実習担当者会議

議長　　大西孝之

7 年目を迎えることとなった 2023 年度の社会共生実習は、8 つのプロジェクトが運営され、95 名の受講生が参加しました。今年度も地域住民・自治体・企業・団体のみなさまのご理解とご協力をもちまして、受講生は各プロジェクトの担当教員とともに現場における課題について探求・解決を図ることができました。衷心より御礼申し上げます。

昨年度まで、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、龍谷大学では独自の行動指針を定め、学内外の活動に一定の制限を設けておりました。それが 2023 年 4 月より「制限なし」の活動制限レベルにまで引き下げられ、いよいよ本格的にコロナ禍以前と同様のおお運営が可能となりました。さらに、学外での実習ができなかった期間に培ったオンラインでの取り組みを活用し、より充実したプログラムとすることができるようになりました。

本報告書では、その 1 年間の取り組みをプロジェクトごとにまとめております。ご高覧いただき、現代社会が抱える課題に対する理解と解決に向けた展望をみなさまと共有できましたら幸甚です。

社会学部は 2025 年度から深草キャンパスに移転し、現在の 3 学科を 1 学科に改組されます。移転改組後もこの社会共生実習は学部教育の特色となる「プロジェクト制」の中心科目となる予定です。さらなるプログラムの発展のため、引き続きご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

2024 年 3 月

地域エンパワねっと・大津中央

担当教員:脇田健一

（1）取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトの前身である「地域エンパワねっと」は、2007 年度、文部科学省の「現代 GP」（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に採択された地域連携型教育プログラム「大津エンパワねっと」のもとにあるプロジェクトとして始まった。この「大津エンパワねっと」の目的は、社会学部が立地する大津市における「地域活性化」、本学部に学ぶ「学生の学びの質の向上」、そして社会学部における「教学改革」にあった。また、教員が学科の壁を超えて教育指導上の連携を行いながら、学生と地域住民の皆さんが直接出会い、地域課題解決のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメントされ（潜在化したお互いの力を引き合い出すこと）学びあう関係を創出することを目指した。そして、この「大津エンパワねっと」が起点となり、2016 年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながっていった。

新たな地域連携型教育プログラムである「社会共生実習」へと移行した段階で、複数の教員によりさまざまな内容と指導方針のプロジェクトが用意されるようになった。ただし、本プロジェクトについては、「社会共生実習」に移行した後も、2007 年度から開始した「地域エンパワねっと」と同様の教学上の基本方針を継承している。その特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会の中から発見し（課題発見）、学生が地域住民の皆さんと協働して実際の課題解決のための実践に取り組む（課題解決）という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」型のプロジェクトに取り組むことは、多くの学生からすれば極めて難易度が高く感じられるはずだ。それは、通常の大学の授業とは異なり、学生個人がひとりで努力するだけでは、良い成果を生み出すことはできないし、達成感も獲得できないからである。

本プロジェクトに取り組む受講生たちは、通常の授業で行われるディスカッションや意見交換ではなく、「課題発見×課題解決」に向けての話し合いを 1 年間継続していかなければならない。このことは、「地域エンパワねっと・大津中央」に限るわけではないが、「社会共生実習」のプロジェクトでは学外や授業以外で活動する必要があるため、そのための時間を、他の授業、課外活動、アルバイト等と調整しながら捻出していかなければならない。また、プロジェクトへのコミットの仕方には個々人よって差異があることから、学生生活の中で、本プロジェクトの優先順位を高く位置付ける受講生とそうでない受講生との間には取

り組みの熱量において差異が生まれてくる。ただそれでも、受講生間で丁寧なコミュニケーションを継続していかなければプロジェクトを進捗させていくことはできない。粘り強さが求められるのである。「自分は頑張っているのに、あの人は頑張っていない」というような不平を自分の内に溜め込んでいたのでは、チームとしてプロジェクトを進捗させていくことはできない。

そのような丁寧なコミュニケーションは、受講生間だけではなく地域住民の皆さんとの協働の際にも同様に大切になってくる。課題発見は、地域の皆さんからまずはお話を伺うことから始まる。しかし、受動的にお話を伺っているだけでは課題発見には至らない。伺ったお話からヒントにしながら、まち歩きをおこない、インタビューを繰り返し、さまざまな地域活動への参加等、自分たちの主体的な活動を通して、課題は次第に浮かび上がってくるからだ。地域課題は、目の前のモノのように存在しない。それは発見されるものなのである。地域課題を発見したら、次は課題解決のフェーズにプロジェクトを進めていくことになる。具体的な活動の中身を計画段階から地域の皆さんに相談と確認をしながらでないと、協働を進めていくことはできない。地域の皆さんからすれば常識的なことでも、受講生からすれば何もわかっていないようなことが多々ある。だからこそ、受講生は自ら進んで地域の皆さんと丁寧なコミュニケーションを継続的におこなっていく必要があるのだ。

前述したように、本プロジェクトに限らず、「課題発見×課題解決」型のプロジェクトに取り組むことは、多くの学生からすれば極めて難易度が高く感じられる。そのような難易度とは、以上のような受講生同士のコミュニケーション、地域の皆さんとのコミュニケーション、そしてそれらのコミュニケーションを同時に継続させながら、地域社会の流動的な状況の中で、そのような状況に柔軟に適応し、必要あれば計画を修正しながら（順応的に）課題解決のための活動を着実に進捗させていくこと、そのようなプロセスの「複雑さ」に起因しているのである。ただし、そのような「複雑さ」を乗り越えて、「課題発見×課題解決」のプロセスと生み出された成果を地域の皆さんと共有すること、すなわち「発見・解決・共有」のプロセスを地域の皆さんと共に経験することにより、自らの「確かな成長」を実感できるようにもなる。そのことが、「地域エンパワねっと・大津中央」を履修することの、いわば醍醐味と言うこともできるだろう。

（２）2023 年度の取り組みの紹介

今年度、本プロジェクトの受講生は、全員で 13 名であった。その内訳は、2 年生が 5 名、3 年生が 7 名、4 年生が 1 名であった。全員が 1 年目の受講生である。前期の「課題発見」の段階で、本プロジェクトのフィールドである大津市中央学区（大津市立中央小学

校区）でまち歩き等をおこない、中央学区自治連合会の役員さんからもお話を伺った上で、学生が強く関心を持った、高齢者に関連する課題、子どもに関連する課題、このふたつの課題に合わせてグループに分かれて活動をおこなうことにした。その結果、高齢者のチームは４名、子どものチームは９名で活動をおこなうことになった。前者のチーム名は「マリーゴールド」、後者のチーム名は「リーラ」である。以下では、それぞれのチームの活動について紹介をおこなうことにしたい。

【マリーゴールド】

マリーゴールドは、高齢者に関心を持ったものの、具体的な課題発見になかなか繋がらなかった。そこで、過去に「地域エンパワねっと」の先輩たちが、高齢者に関してどのような活動をしてきたのか、過去の報告書を丹念に調べ直しそこからまずはヒントを得ることにした。マリーゴールドが関心を持ったのは、先輩たちが取り組みながらも、十分に成果を出せずにいた活動であった。それらは、自宅に引き篭もりがちな男性高齢者が、集まって一緒に料理作りを学び、できた食事を楽しみながら交流することを目的としたプロジェクトであった。2つの学年がこの課題に挑戦したが、参加者がなかなか集まらなかったり、コロナ禍でプロジェクトを継続していくこと自体が困難になったりと、あまり納得のいく成果を生み出すことができていなかった。そこでマリーゴールドは、先輩たちの取り組みを継承・発展させていくことにした。いわば先輩たちが残した「資産」をうまく活用しつつ、先輩たちがやり残した課題に挑戦しようとした。その挑戦が「男の料理クラブ」として実現した。

「男の料理クラブ」

地域の皆さんとの会食の様子

具体的には、中央学区自治連合会の役員の皆さんと連携しながら、ワンコイン500円で参加できる料理のレシピを考案し、「男の料理クラブ」の当日は、参加された高齢男性の皆さんと一緒に、材料の買い出しから始まり、実際に料理を行い、最後は試食するところまでをおこなった。このような「男の料理のクラブ」を、準備会も含めて3回実施すること

ができた。自治連合会の役員さんは、当初より、「今は学生さんたちに自転車の補助輪のようになって支えて応援してもらっていますが、自分たちできちんと自走できるようになります」と宣言されていたが、実際、その宣言の通り、受講生たちが年度内で活動を終えた後も地域の皆さんで活動を「自走」させていくことができるようになった。ささやかな活動かもしれないが、これは画期的なことかと思う。「地域エンパワねっと」の活動が、地域の持続的・自律的な活動へと移行しようとしているからである。

【リーラ】

ミーティング中のリーラ

リーラは地域の子どもに関心を持ったことから、中央学区の自治連合会傘下で活動している子ども会育成連絡会議（以下、子育連）の活動に、いわばインターンシップのような形で参加させていただきながら活動に取り組んでいった。子育連では、月１回、「キッズクラブ」という小学生向けの活動（集団遊び）をおこなっている。子育連の役員の皆さんからお話を伺いながら受講生が気になったことは、「キッズクラブの活動を支える後継者がいない」、「子どもをキッズクラブに参加させてはいても、子どもの保護者はキッズクラブの活動に関心を持っていない」という役員の皆さんの「嘆き」であった。

そこでリーラは、中央小学校の校庭を会場に開催された中央学区の夏の大イベントである「夏祭」の際、会場に集まった地域住民の皆さんに、キッズクラブに関して簡単な聞き取り調査をおこなった。そこで明らかになったことは、子育連の役員の皆さんには少々ショックなことではあったが、意外なことに、「キッズクラブ」の存在や活動内容について知らない人がたくさんいるということであった。このような「発見」をもとに、リーラは自分たちのアイデアを活かしながらキッズクラブの活動や中央学区での行事に参加させてもらった。そしてキッズクラブの広報活動に取り組んだ。そのような活動を積み重ねながら、２月には親子で楽しみながら参加できる「冬の運動会」というイベントを大津市立中央小学校の体育館で開催した。楽しい時間を過ごしながら、同時に、参加された保護者の

リーラが作成した広報用のチラシ

皆さんにキッズクラブに関心を持ってもらえるようにアピールをおこなった。

2022 年度の本プロジェクトの取り組みとは異なり、リーラは、すでにある地域団体の中で活動をおこなった。それは地域団体の活動を側面からサポートすることにもつながった。受講生の「発見」や、その「発見」にもとづく「解決」のための取り組みが、今後の子育連の活動を継続させていくための手掛かりになればと思う。

（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

取り組みの成果については（2）取り組みの紹介とともに述べたので、ここでは本プロジェクトの課題についてのみ述べることにする。

今年度、一番強く感じたことは、「まちづくり」の活動に関して最初から強い関心を持っている受講生ばかりではないということであった。むしろ、個々人の単位習得の都合を動機の一部にしている受講生も垣間見られた。そのこととも関連して、前述したように受講生間で熱量に差があることも気になった。そのような熱量の差は、受講生が所属する学科ともやや相関しているように感じられる。実際、そのような熱量の差は、学外での活動時間の差となって現れることになった。学外での活動時間を捻出するためには、他の授業、課外活動、アルバイト等と調整していくことが必要になるわけだが、それがうまくできている受講生とそうでない（そこまでやりたくない）受講生が混じっていた。後者の学生は、結果としてかもしれないが、本プロジェクトのタスクを要領よく捌いて単位を取得することが目的となっているのかもしれない。もしそうであれば、残念なことである。

本プロジェクトの趣旨・目的と受講生とのミスマッチを防ぐには、履修登録以前の段階で十分なプロジェクトの中身について情報提供をおこないつつ、学外での活動時間を捻出することができるかどうか等についても、あらかじめ確認しておく必要があるように思っている。ただ、本プロジェクトの醍醐味は、そのような熱量の差を乗り越えてチームをどのようにまとめるのか、そして地域の皆さんと共に「発見・解決・共有」のプロセスを経験することにより、自らの「確かな成長」を実感できるようになることにある。そのことを再度確認した上で、今後は趣旨・目的と受講生とのミスマッチをできるかぎり無くしていきたいと思う。

（4）受講生の感想

社会共生実習「地域エンパワねっと・大津中央」

三宅　響子

正直、実習期間はつらいと思うことがたくさんあった。時間がない中で、調査結果をまとめたり、チラシやポスターをつくったりしたこと。時々、地域の方から厳しいお言葉をいただいたこと。大津市中央学区をより良くするため、地域の方々を笑顔にするために私たちは活動してきたものの、未熟な私にとってはそれ以上に、もっと頑張らなければいけないという重圧に押しつぶされそうになったことがあった。そんなとき、リーラの仲間が助けてくれたり、声をかけてくれたりした。今まで私は、人に頼ることができず、自分自身で作業を終わらしてしまうことがほとんどだった。誰かにお願いして適当に完成させてしまうのなら、自分自身で完璧なものを作り上げたかったからである。しかし、それは自己満足であることに、この実習を通して学ぶことができた。たくさんの人の声を聴き、たくさんの人と協力して良いものをつくりあげる。ひとりではなく皆がいるから成し遂げられることもたくさんある。活動をする上で気づけたことだ。「地域エンパワネット・大津中央」を履修して、私は仲間に頼ることができるようになった。

反省すべき点に関して、自分自身の中で「私はこれだけ頑張った」と満足して終わらせてしまったことがあったことだ。「地域エンパワネット・大津中央」は地域のために活動しなければいけないのに、夏祭りの調査結果をまとめたとき、書いたこと自体に満足して、その後や地域の方々の気持ちを考えずに次に進んでいったことがあった。今思い返すと、とりあえず、調査したからまとめなければいけない、という気持ちで書いていた。何のためにまとめるのか、まとめて何がしたいのかを考えていなかった。その結果、まとめたものに関して、キッズクラブの方から厳しいお言葉をいただいた。私はその時、何事にも目的と理由を持って取り組まなければ、誰のためにも何のためにもなっていないと気づくことができた。それから、キッズクラブのチラシをつくるとき、一番伝えたいこと・目的は何なのかを第一に考えるようになった。

「地域エンパワネット・大津中央」の活動はひとりで頑張ることはできない。実習の仲間がいて、先生がいて、地域の方々がいてこそ、成り立つものである。この活動を通して、私は人として成長できたと思う。人に頼ることがどれだけ大切なのか、目的と理由を持って行動することがどれだけ重要なことなのかということに気づくことができた。これらはすべて、「地域エンパワネット・大津中央」を履修しなければ学ぶことができなかったことだ。

そして、「地域エンパワネット・大津中央」を履修して、ひとつ夢ができた。それは、子どもをはじめ、人々を笑顔にするためのイベントを企画する部署に就職することだ。キッズクラブの活動に参加して、たくさんの人の笑顔を見て、「ありがとう」という言葉をいただいて強く感じることができた。「地域エンパワネット・大津中央」で得られたことを今後、自分自身に活かしていけるよう精進していきたい。

ポスター①

社会共生実習　地域エンパワねっと

私たちは滋賀県大津市中央学区でのまちあるきを経験し、外で遊ぶ子どもの姿がほとんど見られない、遊び場がないなどの子どもに関わる課題を発見した。その中でも特に、子どもが増加傾向にある大津市中央学区で担い手不足が課題となっているキッズクラブに注目した。学生だけでなく、キッズクラブや小学校など地域とともに持続可能な団体を目指していきたいと考える。

1. キッズクラブとは

中央学区子ども会育成連絡協議会が運営する。中央学区の子どもたちや地域の方々でいろんな遊びや体験を通じて交流をはかることを目的としている。

2. 課題発見

・キッズクラブの活動に参加（ボール遊び等に参加）
・スタッフの方とのお話
・中央学区夏祭りでのアンケート調査
（保護者・地域の方を対象にキッズクラブの認知度や印象についての調査を実施した）

これらの活動から…

役員不足・スタッフの高齢化・キッズクラブの認知度の低さが課題であることに気がついた。

3. これまでの活動

子ども会育成連絡協議会が開催した様々なイベントに参加させていただきました。

①オータムキャンプ

一緒にカレーを作ったり花火をしたりと、子どもたちのそばでキッズクラブの雰囲気を感じることができた。
↓
キッズクラブは後継者を求めている。
認知度を高めるだけでは課題解決に繋がらない。
→子どもではなく保護者の参加が最も重要である。
保護者に興味を持ってもらうための工夫が必要。

②親子ふれあいウォーキング

グループの人数や時間配分、安全性など自分たちで
一から考え、ゲームを企画・進行した。
↓
親子で参加する企画が子どものみの参加になってしまった。
→保護者への熱心な働きかけが必要。

③中央学区冬の集い

子どもたちと一緒に工作をして交流した。また、地域の方々と直接お話して
様々な地域活動に参加した。
↓
地域活動に参加するのは高齢者が多いことがわかった。
→若い世代への積極的な地域活動参加の呼びかけ。
大津市中央学区のことをもっと発信していく。

４．今後の活動

２月２５日に大津市立中央小学校にて「冬の運動会」を企画している。
競技：ゴール移動式玉入れ・じゃんけん列車・風船運びリレー
親子で楽しめるような活動をしたい。
〈目的〉
親子で参加できるイベントを通して、キッズクラブの認知度向上と保護者の継続的な参加を目指すこと。

5. これまでの実習活動で学んだこと

・実際に現地に行かなければ気づけないことがたくさんある。
・自分たちのやりたいことだけを実行するのではなく、今後地域の方だけでも
　継続していけるものにする。
・気持ちだけではできないこともある。
・あらゆる場合を考え、多くの選択肢を準備しておく。
・すべての要望に応えるのは難しいため自分たちにできることを全力で取り組む。
・地域活動とは“地域を活気づけ、地域の方々を笑顔にすること”

教員　　脇田先生
チーム「リーラ」　佐田・大藪・長岡・金又・于
北山・橋本・森本・三宅

ポスター②

社会共生実習　地域エンパワねっと・大津中央
～男の料理クラブ～

田崎秀斗　山崎菜央　梅田捺生　加野愛純

1.問題を発見し解決策を考える

・大津中央学区の、特に男性高齢者の引きこもり問題に着目
・高齢者の方が集まるようなクラブがない

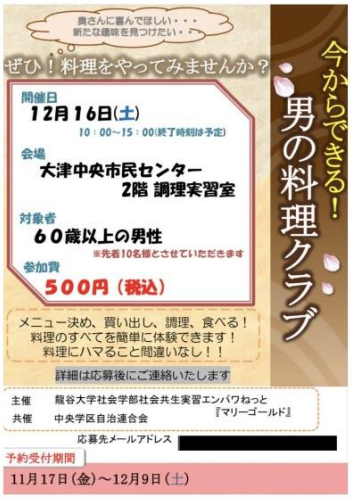
↓

男性の高齢者を対象とした企画を開催
学生が関わらなくなっても地域で継続して開催されるような、
高齢者の地域コミュニティの土台を作る

2.具体的な活動

・コロナで中止となった、地域エンパワねっと2019年度の活動「居酒屋クラブ」を参考にし、安孫子邦夫さん（滋賀県大津市中央学区自治連合会・顧問）と協力して計画
・学生と安孫子さんで事前にテスト運営を行った
・チラシを2500部作り、中央公民館で各自治体に配布
・中央学区の月1開催の定例会で宣伝する

実際のチラシ



3.企画の内容

10:00～10:30　集合、自己紹介
10:30～11:00　買い出し
11:00～12:30　調理
12:30～13:30　食事会
13:30～14:00　片付け、解散

メニュー

・餃子
・厚揚げの豚肉巻き
・きんぴらごぼう
・きゅうりのおつまみ
・卵スープ
・ごはん

買い出しの様子

調理の様子

参加者の方の声

みんなで食べるからおいしい

料理をしたことがなかったので、嫁さんの苦労がよく分かった

簡単で自分でも作れる料理だった

食事会の様子

4.これからの展望

・月1開催を継続する
・日ごろ活動的でない高齢者の方や、地域とあまり関わりのない高齢者の方の参加など、参加者の幅を広げ参加人数を増やす
・参加者の方が社会福祉協議会の老人給食の担い手や、子ども食堂の作り手につながる

「男の料理」高齢男性挑戦

大津で催し 授業の一環で龍大生サポート

「手間かかる 妻に感謝」

京都新聞に掲載

多文化共生のコミュニティ・デザイン

～定住外国人にとって住みやすい日本になるには？～

担当教員：川中大輔

（１）取り組みの趣旨・目的

グローバル化が進展する中，人々の国際的な移動は活発化している。2022 年に国連経済社会局（DESA）が発表した『国際移民ストック』によれば，2000 年に約 1 億 7,300 万人であった国際移民人口は 2 億 8,100 万人に達し，世界人口の 3.6%に至っている。日本も例外ではない。法務省出入国在留管理庁『在留外国人統計』によれば 2022 年末の在留外国人数は 307 万 5,213 人であり，2012 年以降増加し続けている（2012 年末の在留外国人数は 203 万 3,656 人）。日本も既に多くの外国人が定住し，多文化社会となっているのである。また，日本の植民地支配を背景に移住する／させられることとなった在日コリアンをはじめとするいわゆる「オールドカマー」も，1990 年の入管法改正以降に渡日した「ニューカマー」と呼ばれる人々も，移民世代を重ねて日本社会に定着していっている。

しかし，日本が定住外国人や移民背景の住民（以下，定住外国人等）にとって住みやすい社会なのかと言えば，そうではない。「言葉の壁・制度の壁・意識の壁」という 3 つの壁が立ちはだかって，生活のさまざまな場面で苦労を強いられることとなる。日常のコミュニケーションの中で攻撃的な差別に晒されることも見受けられている。日本には体系的／包括的な移民政策や多文化共生に関する基本法もなく，定住外国人等支援は自治体や地域住民の努力任せになっていると言っても過言ではない。こうした中で，定住外国人等の人々が直面している「生きづらさ」から発せられる声に学び，どのような社会変革を成し遂げていくべきかを見いだしていくことが必要とされている。果たして日本社会は「あってはならない違い」をどれほど解消できているのだろうか。「なくてはならない違い」をどれほど保障できているのだろうか。時代と共に変化する「あってはならない違い／なくてはならない違い」について，ホスト社会の人々の認識はアップデートされているのだろうか。「ちがいを越えた協働」をどれほど実現できているのだろうか。多文化共生という言葉は浸透し，社会的にも多くの人に支持されるものとなっているが，残念ながらその「実」が伴っていない。

そこで，本プロジェクトでは，「実」の部分で今どのような多文化共生の取組が求められているのか，その一端を明らかとすることを目的とする。具体的には京都の在日コリアンの方々との交わりを中心に，多文化共生を目指したまちづくりの課題を見いだす。そして，その課題達成のための活動を企画・実践していくこととなる。この過程を通じて，ダイバーシティの向上が，私たち一人ひとりの生を豊かにし，また，新たな社会をつくりだす力の増大につながる道筋を探究していきたいと考えている。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

前期はまず日本社会の多文化共生を巡る課題の実際と歴史的／社会的な背景について理解を形成していった。具体的には，渡来人歴史館で専門員の大澤重人氏から，ウトロ平和祈念館で副館長の金秀煥氏からの解説を受けて，朝鮮半島と日本社会との歴史的なつながり，在日コリアンが日本社会で被っている差別／抑圧，基本的人権の保障と平和な暮らしのために展開されている運動について学ぶこととなった。

事前学習と並行して，本プロジェクトの活動地域となる東九条（京都市南区）を訪れ，コミュニティパートナーである前川修氏（希望の家児童館館長・地域福祉センター希望の家所長），小林栄一氏（NPO 法人東九条地域活性化センター代表理事）や朴実氏（東九条 CAN フォーラム代表）、南珣賢氏（NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファ事務局長）から各団体・個人の活動／運動の展開について説明いただいた。

このフィールドワークを経て，受講生は自らの問題関心に即して活動先を選択し，チームを編成した。そして，現場での実習活動を通じて得られた情報を整理しながら，企画テーマの候補出しを進めていくこととなった。

夏季休暇期間には NPO 法人 IKUNO・多文化ふらっと（大阪市生野区）を訪問した。同法人理事・事務局長の宋悟氏からは，歴史的な経緯に合わせて，御幸森小学校跡地をリノベーションして多文化共生の拠点として整備された「いくのコーライブズパーク（いくのパーク）」の目的・目標や現在の活動についてお話を伺った。まちづくりの視点から多

文化共生を進めるとはどういうことなのか，そこでどのようなことが課題となるのかといった事柄への理解を深めるとともに，今後の活動への示唆を得ることとなった。

後期授業はチームごとに受入先で，活動に従事しながら当事者や支援者，関係者の方々へのインタビューを行い，企画テーマを絞り込んでいった。

京都コリアン生活センター・エルファでは在日コリアンの高齢者の方々とレクリエーションを楽しむなどして一緒に過ごす中で関係を構築していき，一人ひとりの生活／人生について話されることに耳を傾けていった。そして，エルファに集っている人々がどういう意味をこの場に見出しているのかを探っていった。その中で「ありのままの私」を自己受容することを支えていることなどが感じとられることとなった。

しかし，こうしたエルファの価値について，短期間での実習生やボランティア，見学に訪れる人々が見出せないことがあることを課題として設定した。そこで，中心的な働きを担っているスタッフ 3 名の方々に，日常の活動の背景にある思いや，その先に目指すビジョンについてインタビューすることになった。収録時間は 2 時間を越えたため，現場での活動への導入として必要な内容を精選し，30 分ほどの動画にまとめて字幕をつけ，完成させた。完成した動画はエルファでの活用に加えて，来年度以降の本プロジェクト受講生を含む，本学学生へのオリエンテーション等に使用することが考えられている。

（学生が制作した動画の一場面）

東九条地域活性化センターでは，同法人が運営するコミュニティカフェ「ほっこり」で展開されている「ほっこりランチ」や，海外にルーツのある子どもの放課後の居場所を提

供する「子どもクラブ」，地蔵盆の代わりとして今年度新たに企画された「ほっこり夏祭り」，京都府在住の定住外国人を対象とする「年末生活緊急支援活動」に参加した。

この中で，「ほっこり夏祭り」では想定以上の参加者があったにもかかわらず，「ほっこりランチ」の新規利用者が増えていかないことに課題を見出し，広報活動に取り組むことを決めた。具体的には，現在の活動の全体像を紹介するパンフレットを制作することとなった。まず試作版パンフレットを用意し，東九条マダンで配付をおこなって地域の方々からのフィードバックを受けたり，「ほっこり」の方々からの意見や提案を受けたりした後，完成させた。そして，完成したパンフレット約 2200 枚を東九条地域の市営住宅など住民の方々の家々にポスティングしたり，エルファや希望の家に届けたりした。広報は複数手段で継続的に展開されていく必要があるため，「ほっこり通信」のバージョンアップや SNS 活用についても検討していくことが今後の課題である。

（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

受入先の方々の積極的なご協力とご厚意により，受講生は定住外国人等はじめ地域で多文化共生を推進するさまざまな人々と直接に交わる機会に恵まれた。その交わりを通じて，受講生は多文化共生まちづくりの課題を当事者視点から捉えるということを一定程度おこなえたのではないかと思われる。

今年度は特に，受講生から自らの歴史的理解の浅さや無知，自らの内にある偏見について語られることが多かった。例えば夏期オープンキャンパスで本プロジェクトの中間報告をおこなった際，受講生のひとりは自らが抱いていた在日コリアン等に対する偏見が揺らぎ，塗りかえられていったプロセスを紹介し，「大学生活は確かに楽しいものだが，それだけではなく，価値観をアップグレードするところだと思う」と述べていた。自文化中心主義から距離をとり，多文化に寛容な価値観を形成していくことにつながったのであれば，多文化共生社会を創り上げていく市民性の涵養を進める機会のひとつとなったと考えられよう。

ただし，学生の問題意識の明確化や企画テーマ設定で時間を要した点は継続的な課題である。そのため，今年度も後期後半では活動成果を形にすることに傾注することとなり，

理論的な観点から考察を深めていく熟慮／対話の時間が十分にとることができなかった。
実習活動中のできごとに関する批判的省察を深める方途を見いだしていきたい。

（４）受講生の感想

《ほっこりチーム》

三神　有織

■実習を通じての気づきと学び

　履修するまでは持っている知識だけで比較していた。この１年間の活動を通して自分だけのものさしで判断してはいけないという思考に変化が起こった。私が印象に残っている言葉はウトロ平和祈念館で説明を受けた「同情からは何も生まれない」である。なぜ心に残っているかというと、いくら相手のことを思っていたとしてもそれはあくまで自分が上の立場に立っているに過ぎないと考えるからだ。このように考えた理由は、相手と同じ立場で思いやりの心をもって寄り添うことが最も重要であると思ったからだ。しかし、その前提には知識を身につけることが欠かせない。以前に在日コリアンの歴史について学校の授業などで話を聞いたことがあったため、分かったつもりになっている自分がいた。その

ため、初めて東九条地域でフィールドワークをおこなった際には知識の薄さを痛感した。今でも高さ規制のある高架下や道路が盛り上がったままの状態だったこと、鴨川の土手を歩いた経験などから当時の暮らしが想像できた。このことから足を運ばなければ、分からないということを学んだ。よって、疑問を抱いたら行動に移したいと考えるようになった。鶴橋フィールドワークでは宋氏がおっしゃっていた「多文化共生とあえていわないような関係づくりを目標にしている」という言葉が心に響いた。この言葉を聞くまで多文化共生と問われるとそれぞれの違いを認め合うものだと思い込んでいた。言葉を家に持ち帰って改めて考え直すと人は生まれたときから顔が違うことが当然であり、生まれた環境が違えば全部違って当たり前だと捉えることができた。そのため故意に違いを強調せずに他者の意見をそのまま受け取られる人でありたいと思うようになった。

「ほっこり」での活動を通しての変化は相手のことに興味を持って受け入れるという姿勢である。子どもクラブでは最初はあまり話せなかったが一緒にボードゲームやバトミントンをしたことで同じ目線に立って関わることが大切だと分かった。一方で宿題に手を付けず遊んでしまったときの接し方は難しいと感じる場面もあった。このことから宿題をしようというだけではやる気がなくなるため、時間を区切るなどの教え方も学んだ。子どもたちの中には両親が日本語を話せない家庭や年齢が離れていて親の代わりに面倒を見ている子がいる背景を知った。「ほっこり」に来るといつも子どもたちは笑顔で自分らしさを出しているのが印象的だった。その顔を見て私も元気をもらい、何気ないコミュニケーションの大切さに気付かされた。また、さまざまな活動に参加することでこうした一つひとつの積み重ねが信頼に繋がり、地域に密着した関係性が築きあげられるのだと実感できた。チーム全体としてのパンフレットづくりは計画性にかけている部分も見られたが、結果として思いの詰まったものが完成した。これはひとりの意見では成し遂げられなかった。納得のいくものを作り上げるためには連携のとれた話し合いが大切だと分かった。この実習を振り返って、自分の偏見だけにとらわれすぎないことと相手への思いやりの気持ちが変化したと考える。

■実習から考える現代日本社会の課題

多文化共生社会を実現する上で、私が解決しなければと強く思う現代日本社会の問題は外国人労働者や技能実習生をめぐる労働の在り方である。この問題に関心を持った理由は子どもクラブで現在子育てをしている人の話を伺ったことと年末支援事業に参加して支援を必要としている存在に気づいたからだ。子どもクラブで以前まで「ほっこり」に来ていたフィリピン人女性のお話をお伺いした。その方は横浜に引っ越されたあと子どもの面倒がみられなくなり、児童相談所に預けることになったそうだ。その裏には虐待疑いがかけられているため 2 人のお子さんの養育が難しいことが理由だった。また旦那さんとの関係もうまくいっていないという。私は経過後のお話は聞けていない。しかし、そうした背景には金銭面でも苦労があったという話から外国人労働問題について見直す必要があるので

はないかと感じた。そして年末支援事業で物資を手渡しことで定住外国人や技能実習生の声に耳を傾けることができた。こうした繋がりの輪を積み重ねていくことで生活支援だけでなく、心の支えにもなっているのだと感じた。ただ、「ほっこり」では居場所づくりを大切にした関係性がある一方、日本全体で見ると支援は十分ではないと考える。

その実状が外国人労働者や技能実習生に関する問題である。法務省『技能実習生に失踪者の推移（平成 25 年～令和 4 年)』によると、2022 年度は年間でおよそ 1 万人もの失踪者がでているという。その理由として、安価な労働力で働かされることや転職制限がかけられていることなどが挙げられる。私がその問題が今なお解決されずに残っている原因として偏見や差別があると考える。ウトロ放火事件のように誤った認識を持っている人も少なくない。そして自国に帰りたくても帰れなかった人がいた歴史を私たちは伝承していかなければならない。また前述に付随して、日本の少子高齢化の問題が拍車をかけている。問題の解決策として十分な技術を習得することができれば、自由に転職できるような仕組みを提言すべきだと考える。国籍が違うことだけを理由に差が生まれてしまうことは問題である。憲法に定められている基本的人権の尊重にあるように、人が生まれながらに持つ権利を蔑ろにしないことが大切であると考える。最近インターネットで検索していると、少しずつ当事者の声が広まるようになった記事を目にした。その内容とは外国人の技能実習・特定技能の両制度の見直しを検討する政府の有識者会議が昨年 11 月 24 日に開かれ、技能実習制度を廃止し新制度創設を提言する最終報告書を取りまとめられたことだ。これは日本としてもよい兆しのように見える。新制度では名前も「育成就労制度」に改められる方針だ。ただ名前だけが変わり、中身が伴わないことがないようにしてほしい。よって、ひとりの人間として心に寄り添った支援策を最優先にすべきだと考える。

《エルファチーム》

劉　東旻

■実習を通じての気づきと学び

今までの経験を通して私はいくつかの変化を感じた。以下に 3 つの主な変化を示す。第一に、視野の拡大と柔軟性の向上である。韓国出身で育った私は、国の教科書や周囲の環境によって形成された特定の視点を持っていた。しかし、日本で多様な人々と交流し、異なる背景や考え方を理解することで、自分の視野が拡大した。異なる文化や歴史を通じて、ひとつの事象に対して複数の視点を持つ柔軟性も身につけた。この変化は、多文化共生実習を通して他の人々の生活や歴史に触れ、実感を得たことが主な要因だった。新たな視点を取り入れることで、過去の固定的な見解が柔軟に変化し、他者と共感する力が強化された。

第二に、歴史の生々しさと感情の共感である。エルファでのボランティア活動や在日朝鮮人の歴史に触れた経験は、単なる知識以上に感情を呼び起こした。歴史映像や教科書では得られない、ハルモニたちの実際の体験を聞くことで、歴史が生々しく感じられた。これらの体験は感情的な共感を生み出し、過去の差別や苦しみに直面したハルモニたちの強さや希望に触れることで、人間としての共通性を感じた。この感情の共感が、冷静な知識だけでは得られない深い理解をもたらした。

第三に、多文化共生への意識の強化である。エルファでのボランティア活動や動画制作を通して、多文化共生の重要性を再認識した。特に、エルファが「ありのままを受け入れる」信念を持っていることが強く感じられた。これは、他者との対話や理解が、異なるバックグラウンドを持つ人々が共に生きる社会を築く基盤となることを示している。この意識の強化は、他者の異なるアイデンティティや文化を尊重し、受け入れる姿勢を醸成した。また、多文化共生が社会全体にとって有益であることを理解し、その実現に向けた貢献を考えるようになった。

これらの変化は、新たな経験と出会いから生まれたものであり、異なる視点を尊重し、共感する心を育むことが重要であると感じた。

■実習から考える現代日本社会の課題

多文化共生社会を実現する上で、私が強く感じる現代日本社会の問題は、多文化共生における社会的偏見と差別である。この問題に対する私の思いは、実習で日本の多文化共生教育に関する研究や取り組みを深く学ぶ中で形成された。実際の実習経験から、在日外国人や異なる文化背景を持つ生徒たちが、校内外で差別や偏見に直面している現実を目の当たりにした。これは多文化共生社会への理念と現実とのギャップを痛感させるものだった。

特に私は歴史に興味があり、昔からさまざまなドキュメンタリーを見ながら育った。歴史的な流れを確認すると、1965 年に日韓基本条約が締結され、日本と韓国の国交が正常化された。この際、在日朝鮮人の法的地位についても規定されたが、社会的な差別はなかなか解消されなかった。在日朝鮮人は、差別に抗議し、平等権を求める運動を展開した。しかし、未だに社会的な差別や偏見が残る一方で、近年では意識の変化や国際的な人権の視点からの注目も増えている。

現在、在日朝鮮人とその子孫たちは歴史的な差別や偏見に直面しつつも、社会的に統合される努力を続けている。一部の日本人社会は多様性を受け入れ、差別に反対する声も増えているが、まだ改善が必要な分野もある。在日朝鮮人の権利と平等な扱いを求める運動は続いており、歴史的な問題に対する理解と対話も重要であるが、まだまだ問題は山積みである。

なぜこの問題が解決されずに残っているのか、その背景にはいくつかの要因がある。まず、多文化共生教育が不足していることが挙げられる。教育機関や社会全体で異なる文化

に対する理解と尊重が育まれなければ、偏見や差別はなかなか解消されない。また、一般国民の中には、異なる文化や外国人に対する先入観やステレオタイプが根強く残っていることも影響している。

解決策としては、以下の点が重要だと考える。第一に、多文化共生教育の強化である。政府や教育機関は、多文化共生教育を徹底的に実施し、異なる文化や背景を持つ人々に対する理解を深めるプログラムを導入すべきである。これにより、若い世代から異なるバックグラウンドに対する理解が広がる。

第二に、広報と啓発活動である。社会的偏見の改善を目指し、広報活動や啓発キャンペーンを通じて一般国民に対して多文化共生の重要性を伝える必要がある。先入観やステレオタイプを払拭するために、メディアや公共の場での情報発信が重要である。

第三に、多文化祭の推進である。地域で多文化祭を定期的に開催し、異なる文化を理解し合う場を提供することが大切である。これにより、一般国民と多文化構成員が直接交流し、お互いの文化を尊重する機会が増える。

第四に、移住民参加の促進である。移住民が自ら政策に参加し、提案できる環境を整備することが必要である。彼らの声を尊重し、彼らが日本社会において自らのアイデンティティを確立できるような状況を作り出すことが求められる。

これらの取り組みによって、多文化共生社会の実現に向けて社会的な偏見や差別を減少させ、異なる文化が共存する土壌を築くことが可能である。これには個人、教育機関、地方自治体、そして国全体が協力し合うことが重要だと思う。

ポスター①

社会共生実習　多文化共生のコミュニティ
～社会共生の場　エルファ～

1．エルファとは？

京都市内に住む在日コリアンのお年寄りが利用できる介護保険制度があるにもかかわらず、排除されてきた歴史から理解が出来なかったり「日本人のものだから使えない」と諦めてしまう事態から脱却し、社会と繋がってほしいという思いからＮＰＯ法人京都コリアン生活センター・エルファが設立された。
現在は、介護支援や障害者支援をはじめ、通院への同行や日本語が難しい外国籍の方たちが役所で手続きする際のお手伝いなど制度でカバーできない生活支援活動なども行っている。

2．ハルモニとのふれあい

◎ハルモニ(おばあちゃん)たちとおしゃべり
◎エルファ体操、ゲーム、カラオケに参加
◎運動会などの行事に参加

→ 職員さんと仲良くお話している姿、「エルファでの一日が楽しい」という声から生き生きとしたハルモニの姿があった。

かつて「在日コリアンである」というルーツを日本社会の中で隠しながら生活をしてきたハルモニたちも多く存在する。制度から排除されるなど不当な扱いを経験しながら、自分らしさ(アイデンティティ)を見失いつつあった。
エルファはそんなハルモニたちのルーツを大切にし、一人ひとりの希望を叶える自己主張が出来る環境が整えられている「自分らしさを見つけられる」施設であるということに気付いた。

◎課題発見

エルファという団体としての取組みや普段の様子が知られないまま実習やボランティアに参加する人々が多いのではないだろうか。
そのため、せっかくエルファに来ても実習の目的がはっきりしないまま時が過ぎてしまう人々がいるかもしれない。

◎問題設定

エルファで実習に参加する学生やボランティアとして参加する方々に向けて視覚・聴覚的に多くの情報が得られる「動画」を制作することでエルファが行っている事業や日常生活の様子について理解し、エルファでの活動に役立てる一つの手段になるのではないかという思いから動画制作を開始。

3．取り組み内容

◎動画制作プロセス

エルファにかかわる方のお話を動画構成の中心にしたいという思いから以下３名の方々に撮影依頼。

・エルファ事務局長：南珣賢(ナム スンヒョン)さん
・在日コリアンの年金問題に携わる在日三世：鄭明愛(チョン ミョンエ)さん
・エルファ共同作業所 責任者：さとう大さん

[質問内容]
・エルファとかかわったきっかけ
・エルファでの活動内容
・エルファでの印象的なエピソード
・今後どのように地域で影響を与えたいのか
・あなたが考える「多文化共生」とは

南珣賢さん

エルファに来ると「ありのままの自分」を発揮できる、そんな場所でありたい

鄭明愛さん

誰もが暮らしやすい日本社会の実現に全力を注ぎたい

さとう大さん

「マイノリティの方と共に何が出来るのか」という考えに気付かされた10年間でした

◎動画制作を通して

・一人ひとりのお話を聞くことで、「多文化共生社会」実現に向けてエルファで活動する強い思いを感じた。なので、この思いをより多くの人に知って欲しいと思った。
・“ありのままを受け入れる”というエルファの信念が撮影の中から感じられ、その姿勢はハルモニが自分らしく生活できる要因になっていることが分かった。

◎動画を見たエルファの職員さんは・・・

＜南さんの感想＞
私を含む職員3名の取材内容が動画の中心になっており、それぞれの立場から多様な話が聞けたので非常に良かったです。

4．実習を通して学んだこと

◎在日コリアンの歴史に関してこれまで歴史映像などを頼りにして知識を得ていたが、その時代を経験したハルモニから直接話を聴くことで、差別を受けた現実など**知識だけでは伝わらない歴史の生々しさ**を感じた。このことを今回作成した動画を通してより多くの人たちに知ってもらい、この歴史を繰り返さない社会づくりに関わりたい。

◎**多文化共生の先駆け**となる取り組みを行っているエルファは、マジョリティーの人やマイノリティの人が「相互理解し寄り添い合う」場所として重要であることを感じた。

ポスター②

～多文化共生のまちづくり～
コミュニティカフェほっこり

ほっこりとは？京都東九条地区の南岩本市営住宅に位置している。東九条地域は在日コリアンと一緒にコミュニティを形成してきた歴史がある。そのような中で2018年に市営住宅1階の空き店舗を活用する形でコミュニティカフェほっこりが誕生した。設立するにあたっての理念として、東九条地域の歴史の継承、多文化共生社会の実現、地域福祉などを目的としている。そして非営利活動を通して現在も地域活性化に貢献している。

ほっこりは様々な団体と連携している
東九条改善対策委員会・エルファ・まめもやし・東九条地域包括支援センター・故郷の家・京都・東九条ＣＡＮフォーラム・地域の住民団体・医療福祉関係者・市民団体・個人など

1.一年間の主な活動内容

フィリピンランチ

定住外国人の困りごとなどを気軽に相談できる生活支援としてランチの営業が始まった。この写真は春雨炒めと野菜春巻きで、特有のスパイスが特徴的。
ランチの収益金は定住外国人女性や子どもたちへの支援金となる。

夏祭り

今年初めて開催された。その背景にはこの地域では地蔵盆が行われておらず、子どもたちに夏の思い出をつくってもらいたいという思いから実施に至ったという。私たちはポップコーンやかき氷などを提供する作業をお手伝いした。中でもお化け屋敷は大人気だった。また希望の家児童館からも来てくれた。子どもだけで70人という予想を超える結果だった。

東九条マダン

11月3日(金)に旧山王小学校で開催された。劇やハングルの太鼓での演奏は民族の違いを超える力があった。閉会式に流れた東九条マダンの歌にのせて地元の子どもから大人まで円になって踊ったことは地域の絆として受け継がれてほしいと思った。

子どもクラブ

定住外国人の家庭から子どもの居場所がほしいという要望がスタートするきっかけとなった。親が仕事で働いていたり、児童館の値上げなどという理由から子どもだけで集まるフリースペースが減っている。そのためここは親子にとっても安心できる居場所となっている。

みんなでカレーを食べる会

毎月第１日曜日の夕方にカレーを作り提供している。こどもは無料、大人で可能な方はカンパ３００円。始まる契機になったのは子どもクラブを通して、食の問題が明らかになったことだった。そのため、カレーには具沢山の野菜をいれることで栄養面への気遣いがなされていた。

年末支援事業

2021年にコロナ禍で生活が困窮する定住外国人家庭や技能実習生に支援物資を届ける活動が始まった。そしてカトリック教会のシスターを中心とする在京都フィリピン人コミュニティ団体であるジャピノン・セッショニスタとの繋がりも深い。この活動を通して、支援の輪が心の支えにもなっていると実感できた。

2.活動して明らかになった課題

活動を通して常連のお客さんが多いことを感じた。よって、ほっこりがあることを現在悩みを抱えている外国人や地元の高齢者に知ってもらいたい　さらに多文化共生に興味のある人にも広めていきたい

3.課題解決　パンフレット作成

試作用

東九条マダンで**試作用**パンフレット配布
地図が見にくい、情報量が多いなどの意見があった。

コンセプトを明確化
地元の人たちが自分を大切にするために安心できる居場所づくりの役割を担う。　“Heart Home”

再度、ほっこりの方とミーティング
新規のお客さんよりも多文化に理解のある人に来てもらいたい。
方向性を再確認

本番パンフレット完成!!
イメージカラーにオレンジを使用することで温かみを出した。文字のフォントやサイズは高齢者が見やすいように工夫した。そして、お店の看板である暖簾をモデルに開く向きを三つ折りに設定した。

パンフレット配布
東九条地域、市営住宅、エルファ、希望の家など約2200枚ポスティングを行った。また洛南教会の方にも協力していただたり、ほっこり通信にも挟んでいただいた。

実際に出来上がったパンフレット

4.結果

地域の方々からパンフレットの評価として内容が豊富で見やすいなど高い評価をもらった。ただ、パンフレットのソフトドリンク券を持ってこられたお客さんは現時点ではいなかった。今後、このパンフレットを見て興味を持ってきてくれる人が出てほしいと考える。

6.活動を通して学んだこと・展望

ほっこりの方とのやりとりで対話することが大切だと学んだ。特に定住外国人の方は困っていても困っていると言いにくい人が多い。そういった人たちが心を開いてもらうためにはいつも同じ時間帯にお話を聴いてくれることが生きることへの後押しになっていると思った。
見えてきた課題は現在高齢者が中心となっていることである。今後の展望として、40代50代が中心となることやほっこり通信の在り方を見直し、SNSの更なる活性化が必要であると考えた。

5.現場での声

朴さんは小さい頃からこの町と共に生きてこられた。将来の東九条地域について思いを尋ねると、「町の風景は変わっても庶民の町であることに変わりはない。社会的弱者にとっても優しい、助け合える町であってほしい」としっかりとした眼差しで語ってくださった。

パクシル
朴実さん

7.振り返り

知識がない状態で偏見を持つのではなく、自分で歴史を学ぶなど知ることが大切だということ

コミュニティは即座に築き上げられるものではなく、積み木のように一つひとつが重なり合い成り立っているということ

偏見や差別は知らないところで起こる。そのため、歴史や文化を知ることが大切

メンバー
浅田裕也
大峠秀太
火野坂栞
三神有織

コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト

担当教員：久保和之

（1）取り組みの趣旨・目的

コミュニティの広報活動を学ぶために、各種事業に参加する。事業の補助や広報活動業務を実際に見て体験して学ぶ。社会の少子高齢化や情報化が進むとともにコロナ禍において、地方のレクリエーション協会では、スタッフの高齢化が進み、業務活動の継続が困難な状況が生じ始めている。社会的な組織の重要な業務のひとつに広報活動があり、それを担う人材の育成が重要視されてきている。そこで、地方団体の広報活動について、実践を通して学んでいく。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

①滋賀県レクリエーション協会　運営指導部会に参加

初回の会議で自己紹介

書記なども体験

②広報部の SNS 発信

「X（旧 Twitter）」「Instagram」「Facebook」の滋賀県レクリエーション協会の公式アカウントを作成し、活動紹介や大会の情報などを発信した。

X（旧 Twitter）
ID；shiga_rec

Instagram
ID：　shiga_rec

Facebook
ID：滋賀レク

X（旧 Twitter）

Instagram

Facebook

③大津市真野浜にてフロートレース「浮き輪で GO！」開催

ポスターの説明

幟のデザイン指導

下見で実地検分

フロート試乗

作成した幟

レースの様子

表彰式で賞品授与

ニュース番組の取材

作成したポスター

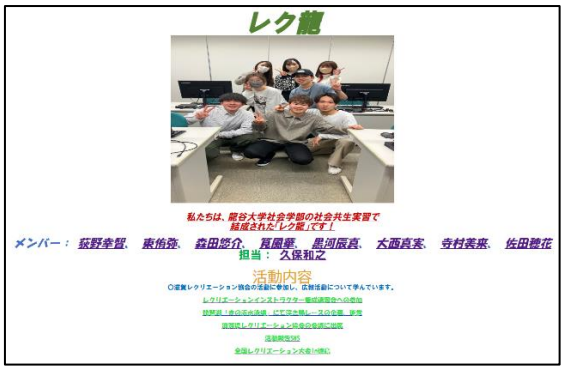
④指導者養成講習会への参加および取材

講習会の様子

実際にゲームを体験

⑤ホームページ作成

広報ツールとしての WEB 発信について理解するために、自分たちのプロジェクト紹介のウェブページを作成した。ホームページの仕組みについて学び、実際に HTML のタグを使い、プログラミングを体験した。



画像の処理について

個人ページの作成中

⑥全国レクリエーション大会

2023 年 9 月 15 日から 17 日に徳島県徳島市で開催された全国レクリエーション大会に参加した。

《総合開会式》

寺村　美来

9 月 15 日 14 時～16 時 30 分に第 77 回全国レクリエーション大会 2023 の総合開会式がアスティとくしま多目的ホールにておこなわれました。

まず、オープニングでスポーツチャンバラ演武がおこなわれました。次に全国レクリエーション大会・実行委員会会長岡山千賀子氏、特定非営利活動法人・徳島県レクリエーション協会青年部らによって大会旗の入場がおこなわれました。大会旗が入場し、総合開会式の幕開けとなりました。その後、大会旗と同様岡山千賀子氏による開会宣言、公益財団法人日本レクリエーション協会・理事長樋口修資氏、スポーツ庁・審議官星野芳隆氏によるあいさつ、徳島県知事後藤田正純氏、徳島市長内藤佐和子氏による歓迎のことば、徳島県議会・議長岡田理絵氏による来賓祝辞、レクリエーション運動普及振興功労者表彰がおこなわれ、総合開会式の前半は幕を閉じました。

休憩を挟んだ後、ABO60（阿南ベースボールおばちゃん 60 歳以上）によるチアダンスの披露から後半戦がスタートしました。60 歳以上とは思えないほどのキレのあるダンスで、一体感がありとても凄かったです。次に徳島エンゲル楽団・徳島大学交響楽団による演奏、娯茶平による阿波踊りが披露されました。徳島県で阿波踊りを見るのは私自身初めてで、生で見る阿波踊りは迫力があり、とても魅了されました。最後に徳島県ローラースポーツ連盟コンドークラブによるローラースケートの披露により総合開会式の幕は閉じました。徳島ならではの演出で県外客をおもてなし、華々しく大会のオープニングが飾られました。

《交歓の夕べ》

荻野　幸智

9 月 15 日 18 時～19 時 30 分、会場　徳島グランヴィリオホテルにて第 77 回全国レクリエーション大会の交歓をおこないました。全国のレクリエーション協会関係者たちが集まり、これからおこなわれる研究フォーラムに向けて食事や歓談をしながら交友を深めた機会となりました。

最初に今回の大会の実行委員会会長の岡山千賀子氏があいさつをし、その後日本レクリエーション協会理事長の樋口修資氏が乾杯の音頭を取りました。その後合流タイムとなり、各々がビュッフェ方式の食事を取り始めました。ウクレレなどの楽器の演奏を聴きながらビールなどを飲み、食事を楽しみました。

参加者がほどほどに酔いが回ってきた頃に阿波踊りの披露が始まりました。まず演者たちが見本をし、その後参加者たちがリズムに合わせて踊り楽しみました。

最後に阿波踊りの演者たちとの写真撮影があり、締めのあいさつを折原守氏がし、今大会の交歓は幕を閉じました。

《伝統文化に触れて楽しもう～阿波人形浄瑠璃の魅力～》

佐田　穂花

9 月 16 日 10 時～12 時、第 77 回全国レクリエーション大会にて、最初に参加したワークショップでは講師：佐藤憲治氏、公演：鳴門座（阿波人形浄瑠璃人形座）の方々による人形操作の体験、「傾城阿波の鳴門　巡礼歌の段」の公演など人形浄瑠璃の魅力を知り、伝統文化を学びました。

人形浄瑠璃とは、太夫の語りと三味線の音色で演奏される音楽「浄瑠璃」と人形芝居が組み合わさり誕生したものです。人形浄瑠璃の人形の大きな特徴は、3 人でひとつの人形を動かす 3 人遣いにあります。3 人遣いにより、役ごとの表情や動作の細かい感情表現が可能となっている、世界的にも珍しい操法なのです。

ワークショップでは、人形の歩き方や座り方、役ごとの泣き方や動作の違いなどを教えていただきました。人形の年齢や性別などの設定の違いでこれほどまでに動かし方や表情が変わってくるのだとわかりました。「ととさんの名は十郎兵衛、かかさんはお弓と申します」のフレーズで有名な公演の演目「傾城阿波の鳴門　巡礼歌の段」では人形の表情・動作による繊細な感情表現だけではなく、緊張感のある演技に参加者は公演に夢中になっていました。あっという間でしたが、伝統文化に触れ、多くを学び、無事終了しました。

《～YouTube で新たな形のレク財普及事業の展開～》

東　侑弥

9 月 16 日 15 時 30 分～16 時 20 分、第 77 回全国レクリエーション大会の 2 日目では徳島文理大学にて YouTube や SNS などを活用した研究フォーラムが開催されました。担当講師は浦江千幸氏で 1970 年代からレクリエーション活動を開始し、77 年には BTRD 創設、福祉レクダンスの普及により全国で活動、2000 年代からは中国など海外でも活躍されている方です。

この研究フォーラムではまず、SNS の著作権について講義方式で学びました。ダンスには音楽が不可欠です。しかし、ダンスをインターネットにあげるには法律上の制限があり、著作隣接権と言います。一方、YouTube や流行りの TikTok では音楽著作権協会と協定を結んでいるため、音楽が使えるそうです。

次に、浦江氏の YouTube 動画を見ながら実際に著作権をどうすれば回避できるのか学びました。歌はボーカロイドを使い、原曲は使わないのがポイントです。また、原曲とどのソフトを使用したかは必ず動画内に載せる必要があります。

最後に、浦江氏の YouTube からレクダンスをひとつ、受講者全員で踊りました。曲は中島みゆきさんの「糸」でダンスは浦江氏考案のもので座ったまま誰でも簡単に踊ることができます。写真はレクダンスの様子です。

このフォーラムは著作権など専門的な内容が多かったため、受講者の中には難しいと感想を述べた方もいました。しかし、普段見ている YouTube がどのように成り立っているのかを知ることができ、良い経験になりました。

《レクソングはアカペラで》

～いつでもどこでも出来るレクソングを学ぶ～

森田　悠介

9 月 16 日 15 時 30 分～16 時 20 分、第 77 回レクリエーション大会の 1 日目では講師に現在、全日本合唱教育研究会顧問の千葉 祐氏をお招きし、人々が道具なしで楽しむことが出来るアカペラのレクソングを紹介して頂きました。

一般的なアカペラとこの研究フォーラムで紹介されたアカペラにはいくつか相違点がありました。1 つ目は、周りの人たちと向かいあって手を合わせて歌う場面がありゲーム的要素も取り込んでいました。それによって、周囲の人と自然にコミュニケーションをとることができました。2 つ目は、正しいリズムや音程で歌うことよりも曲の世界観を意識して、楽しく歌うことを重要視されていました。その結果、会場全体で一体感をより感じました。

《サウンド・エデュケーション》

～世界は音であふれている！「聞こえる」から「聴く」耳へ～

大西　真実

レクリエーション大会２日目の９月16日13時～15時に私たちは音を「聴くこと」の楽しさについて学ぶ研究フォーラムに参加しました。担当講師は、青森中央短期大学幼児保育学科教員である木村貴子氏です。

好きな音楽や、日常生活で感じる音、季節によって異なる音など世界はさまざまな音で溢れています。これらの音を普段私たちは、何気なく「聞いている」かもしれません。しかし、この研究フォーラムでは、「聞く」から「聴く」ことを意識づけさまざまなワークを通して音を聴くことを体験しました。

はじめは、アイスブレイクとしてリズムを楽しみ体感するワークに参加しました。グループごとに「カエルの歌」や「チューリップ」など昔ながらの日本民謡の歌のリズムに合わせて、相手に伝えられる、伝えるワークに挑戦しました。

また、下に掲載している写真は、２人１組になり、目隠しをしている人に向けてペアが「にゃーにゃー」や「ピロピロ」など独自に考えた呼びかけをして教室内を動き回るワークでした。その他にも、お題である「雨」をテーマに広告のチラシを使い自ら音を創り出すワークもおこないました。

これらのワークを通して、「音を聴く」ことによって、音を共有し、楽しむことを肌で体感することができ、非常に興味深い時間を過ごすことができたと感じています。

《～阿波和紙で作るきらきらランタン～》

筧　風華

9 月 17 日 11 時～12 時、第 77 回全国レクリエーション大会の 2 日目では徳島文理大学にて NPO 法人 徳島県レクリエーション協会（クラフト部）の方々を講師に迎え、色とりどりの阿波和紙等を使ってのきらきらランタンの作り方を学びました。

阿波和紙は、手すきならではの肌触りと生成の風合い、そして薄くても水に強く、破れにくい丈夫な紙質です。きれいな色とりどりの阿波和紙を張り合わせるとともに LED ライトを使い、ほんのりとしたやさしい光のランタンが出来上がります。

参加者たちは制作時間 1 時間という制限があったため、自分の理想とする色合のきらきらランタンを完成させるために集中力を高めて取り組んでいました。1 時間以内で作り上げるためには、阿波和紙を大きめにちぎり、別の阿波和紙と重ねるようにのりで貼るのが大事だと分かりました。1 時間という短い講習時間の中でしたが、参加者たちは「MY きらきらランタン」を無事に作り上げ、今大会の講習プログラムをすべて終えました。

きらきらランタン

材料・道具	紙コップ、LED キャンドル、阿波和紙、毛糸、グルーガン、新聞紙、ハサミ、ボンド、刷毛、プラカップ、ぬれティッシュ等

《全国レクリエーション大会　まとめ》

黒河　辰真

私たちはこの大会を通して、レクリエーションの２つの魅力に気づくことができました。

１つ目の魅力は「初対面の人とでも自然に話せるようになること」です。さまざまな研究フォーラムに参加した私たちは今大会が終わる頃、知らず知らずのうちに全国各地のいろんな方とお話しできるようになっていました。その方たちは全員、私たちが参加した研究フォーラムにおいて共にレクリエーションした方たちです。一緒にレクリエーションをしたからこそ、時間が経ってからでもまた話すことができる。レクリエーションは新たな出会いをサポートしてくれる、そんな魅力があるのだと身をもって実感しました。

２つ目の魅力は「多種多様だからどんな人でも楽しめること」です。私たちが参加したレクリエーションはわずか 5 種目ですが、今大会では他にも若年層向けから高齢層向け、スポーツ好きから文化好き向けなどの多種多様なレクリエーションが開催されていました。また、男女で分かれるレクリエーションも基本的にはありませんでした。このように多種多様だからこそ、誰もが、いつでもどこでも誰とでもおこなうことができるというのはレクリエーションの大きな魅力だと感じました。

今大会は参加者のほとんどを高齢者が占めているように感じましたが、これらの魅力を実感した今、レクリエーションは社会で活躍する若い世代も注目するべきだと思います。新しい出会いの場で、うまくいっていない集団内で、レクリエーションをおこなうことで団結力が生まれ集団として成長できると思います。

また、「初対面の人とでも自然に話せるようになる」「どんな人でも楽しめる」そんな魅力を持つレクリエーションが普及すれば、いじめや高齢化社会による要介護者の増加、日本の過度な男女格差などの社会問題も解決に一歩近づくと言っても過言ではないと思います。レクリエーションによる世界平和。みなさんもレクリエーションを始めてみませんか？

（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

本プロジェクトは昨年度から引き続き、2 年目であった。手探り状態の中でスタートした昨年に比べて、ベースができたうえでの活動となった。全体的に見ると十分な成果があったように思われる。まずは、昨年に引き続き、何度も現場に出向いてたくさんのことを学ぶことができた。実際に現場に出向いて活動することによって、それぞれの事業について身をもって理解できたと思われる。滋賀県レクリエーション協会という団体の情報発信がメインであったが、まずは現状を知るとともにその解決方法を探り試行錯誤していくというプログラムであった。

活動のひとつである SNS 発信は昨年度から始めたが初年度は、要領がわからずにただ単に作業していただけであったが、今年度は理論的背景を学び、いくつかの技法を試したことによりフォロワー数を昨年の 3 倍以上に伸ばすことができた。

学生企画のフロートレースでは、今年度は新たに広報活動としてポスターと幟を作成し、掲示するところまで進めることができた。実践することによって作成する方法や業者や作業などを学べた。また、事業の収支についても理解を深めることができた。

今年度は、徳島市で開催された全国レクリエーション大会に参加し、全国のレクリエーション実践者の研究発表や実践報告を聞くことができ、課題解決に向けてあらたな側面を知ることができた。

課題としては、各活動のモチベーション維持があげられる。昨年と同様に多くの活動を進めたためにメインの活動である広報活動に割り当てる時間が少なくなった。また、受講生によって作業量の差が大きく、1 年目の受講生と 2 年目の受講生とのバランスをうまくとることがあげられる。さらに受講生が実践した活動の効果が見えにくく、効果測定について考慮することも今後の課題である。

（4）受講生の感想

筧　風華

レク龍では主に夏休み期間に滋賀県の真野浜水泳場にて「浮き輪で GO!」というレースを開催したり、X（旧 Twitter）・Instagram・Facebook の 3 つの SNS を通してレクリエーション種目を広めるという活動をおこなったりした。

「浮き輪で GO!」とは、砂浜から約 18 メートル先の海の中まで走って行き、折り返してスタートラインの砂浜まで戻ってくるタイムを競う競技で、原則小学 5 年生以上を対象に 2 人 1 組でおこなったタイムトライアルレースのことだ。このイベントの企画や運営をしている中で、開催に至るまでの事前準備やイベント開催中の動きなどがとても大変だった。事前準備では、レースそのものをトーナメント制にするか、どのような人に景品を渡すかといったレースの大元になるところから細部に至るまでを参加者のことを想定しながら考えていくのが難しく大変だった。その中でも特に人目に付きやすい「のぼり」を作るのに苦労し

た。のぼり作りの担当ではなかったメンバーにも手伝ってもらいなんとか完成することができた。イベント開催中の時には、レク龍メンバーが突然 2 人も欠席するという困難な場面にも遭遇したが、互いをカバーし合い、転覆などからの危険な事故が起きないように常に緊張感を持って開催した。「浮き輪で GO!」を開催したことによって、同時に開催されていた「ゴザ走り」と一緒に真野浜水泳場を盛り上げることができたと感じる。そして、真野浜水泳場に来たお客さんがどちらの競技にも参加しやすいように開催時間を互いに配慮しながら競技をおこなうことができた。

SNS 活動では、Instagram を担当した。レク龍のために作られた新しいアカウントで活動内容やレクリエーション種目を発信していた。レク龍のアカウントを見かけたという声はたくさん聞いたが、フォローしたと言ってもらえる機会は少なくフォロワーを増やしていくことがこんなにも困難であるのかと思った。そこで、「共感・確認・参加・共有/拡散」という 4 つのポイントを把握することから始め、ただの写真やコメントだけで情報を発信するのではなく、文字入りの写真や多くの人に引っかかりやすいハッシュタグをたくさんつけて投稿するようにした。すると、フォロワーが約 30 人で止まっていたのが、一気に約 130 人まで増えることになった。中でも投稿したレクリエーション競技の協会の方からフォローしてもらうこともでき、横のつながりを広げることになった。また、SNS の発信から「浮き輪で GO!」の参加者希望もあり、好循環な出来事も作り出せた。

レク龍という「社会共生実習」を受講したことによって、瞬時に対応し行動する力が身についたと感じる。そして、メンバーで同じ目標に向かって団結することが出来れば最後まで物事をやり切ることが出来ると感じた。また、SNS 活動を通してやり方や工夫次第で多くの人にフォローしてもらうことができ、情報を発信しやすい環境を自分たちで作っていくことが大事だと思った。

ポスター

コミュニティの情報発信！
～レク龍プロジェクト～

メンバー：東侑弥、大西真実、荻野幸智、筧鳳華、黒河辰真、佐田穂花、寺村美来、森田悠介

1．広報

「レクリエーションの良さを多くの人に広めること」を目標に、広報を学ぶ活動として滋賀県レクリエーション協会（滋賀レク）のお手伝いをした。

○主な広報活動

・滋賀レクのSNS 発信（Instagram・X・Facebook）

・滋賀レクの広報誌の作成

発信数：各アカウント約60発信

フォロワー数の増加：全アカウント合わせて100人以上！

○活動を通しての反省点、課題

時期によって発信頻度が低いときがあった。

来年度はより多くの人にレクリエーションの魅力を知ってもらうことを目標とし、SNSの発信頻度を上げ、フォロワー数を増加させる。

Instagram　X　Facebook

Instagram

Facebook

2．学生企画

○主な活動内容

・浮き輪レース（浮き輪でGO！）の企画、運営

8月7日、23日、24日の3日間に渡って、私たちレク龍生が企画した浮き輪レースを行った。

○レース開催に向けての準備

・のぼり作成

受付の位置を明確にする目的で作成した。

・広報用ポスター作成

参加者を集めるため、レースのポスターを作成し大学内にいくつか貼って宣伝した。

・役割分担

準備や本番を円滑に進めるため役割分担をして一人一人が責任とやりがいをもって活動できた。

・保険関係

レース開催には万が一の危険があるため、参加者全員に大学が用意した保険に加入していただいた。

○学んだこと

本番では開催日前日の雨の影響で不測の事態にも遭遇した。準備段階で計画していた通りにはなかなかいかず、起こり得る様々な事を想定して準備をしておくことが必要である。

イベント運営のレクチャーを受けてます

浮き輪でGO！開会式

浮き輪でGO！のぼり

テレビで紹介されました！

浮き輪でGO！ポスター

浮き輪でGO！レース風景

3．レクリエーション・インストラクター養成講習会

〇主な活動内容

・講習会のお手伝い

長浜市の木之本まちづくりセンターで行われた講習会にお手伝いとして参加した。参加者と共に私達も同じ講習を受けて実際にアイスブレイクなどを体験したことでレクリエーションの楽しさや必要性を理解した。

・レクリエーション指導

講習会で教わった様々なレクリエーションを参考に実際に参加者に向けてレクリエーション指導の体験を行った。

人間知恵の輪

スポンジ積み上げ中

マインディスティックカーリング

レクリエーション指導

〇学んだこと

レクリエーションインストラクターの高齢化が進んでいることが分かった。私達若者が情報発信していくことで、特に若者の指導者を増やすことは実現可能になる。若者の勢いが必要不可欠である。

4．全国レクリエーション大会

〇主な活動内容

・全国レクリエーション大会への参加

9月15日、16日、17日の三日間に渡って、徳島県で行われた全国レクリエーション大会に参加した。

・研究フォーラム

人形浄瑠璃、アカペラ体験、ランタンづくりなど大会には多種多様なレクリエーションが研究フォーラムとして開催され、私たちは分担して6つのフォーラムに参加した。

・交歓の夕べ

初日の夜に行われた交友を深める会で徳島伝統の阿波踊りで盛り上がり、食事を通して参加者の方々といろいろなお話ができた。

交歓の夕べ

阿波和紙で作る
キラキラランタン

人形浄瑠璃

開会式

〇学んだこと

大会運営について学ばせてもらうことが多かった。まず、受付が分かりやすく、混まないよう何人も配置され作業を分担していた。また、案内係など運営側の方々の連携がとても参考になった。学生企画をするにあたってのお手本を見れるいい機会だった。

5．HP作成

〇主な活動内容

・レク能HPの改良

昨年度作成したHPの個人ページとホーム画面を作り直した。

レク能HPトップ画面

レク能HPはこちら

〇学んだこと

1からHPの作り方を学び、HTMLなど新しく覚えることが多くHP作成の難しさが分かった。

6．まとめ

今年度は昨年度と比べてSNS投稿や学生企画に力を入れた。SNSではInstagramでフォロワー数が100人を超え、一番の増加率になった。学生企画は昨年度の経験と反省を活かし役割分担や保険関係、ポスターを使った宣伝などをしっかり行った。その結果、本番の予定人数を超える大盛況につながった。

農福連携で地域をつなぐ

ー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本清彦

（1）取り組みの趣旨・目的

障がい者の雇用機会拡大と農業の担い手確保を主な目的として普及してきた農福連携事業は、近年、農福連携が障がい者だけでなく高齢者やひきこもり者も含めた多様な人をつなげ、地域づくりの契機としても注目されています。その一方で、農業や福祉関係者以外には、農福連携という言葉自体も広く認知されているとはいえません。

本プロジェクトは、滋賀県栗東市で農福連携を通じて地域社会をつなげてきた障がい者支援組織「おもや」で、障がい者やスタッフとの農作業や地域の朝市への出店など、農業と福祉が交差する多様な活動に参画して、農業や福祉の課題を学んだり、多様な人々がどう働き、生き、つながりをつくっていけるのか考え、実践することを目指しました。特に今年度はおもやの内外の関係者に対する「農福連携」についての認知度、理解度向上を図る活動を取り入れました。

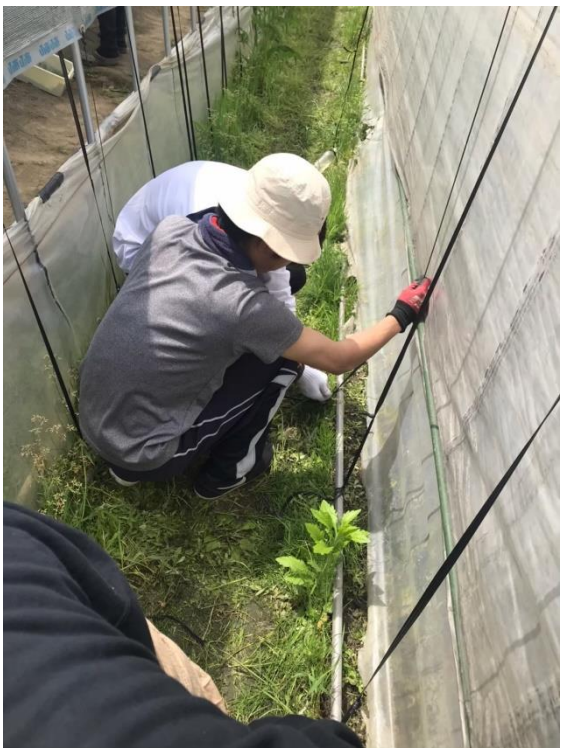
また関係者へのインタビューや参与観察といった社会調査や、イベントの企画準備運営などプロジェクトマネージメント的な実践経験を通じ、受講生が座学と現場を往還しながら複層的に学ぶ実習活動を仕組みました。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

初回の瀬田学舎でのガイダンスの翌週から、毎週金曜日の午前中におもやでの活動を本格的に開始しました。本プロジェクトは 3 年目であり、実習自体についてはおもやの方々にはすでに認知されていましたし、昨年度に続いて受講した受講生が複数いたため、現場作業への導入はスムーズに進みました。とはいえ昨年度と同様、新規受講生とおもやのメンバー（利用者）やスタッフとの信頼関係構築が改めて必要であり、一緒にさまざまな作業を経験してもらいました。前期、後期を通じて、ビニールハウスの被覆作業、いちじくの誘引（ひもで枝を固定して樹形を整え、結果時の枝の折損を防ぐ）、草引き、マルチシートや作物残渣の片付け、種まきから収穫まで種々の圃場作業や、野菜の調整や袋詰めといった出荷準備作業を、受講生がおもやの方々と一緒におこない、作業の説明やたわいもない会話も含めたコミュニケーションを通じて関係性構築を図りました。

受講生は、さまざまな農作業を通じて、農業が天候に左右され、時に重労働も伴い、地道な作業の繰り返しであることなど、その大変さを改めて認識しました。一方で、慣れることで作業がうまくいくようになったり、他の人との共同で作業を完遂させることの楽し

さや、自然の中で身体を動かす農作業の良さを学んだという声もありました。



ビニールハウスの被覆作業　おもや利用者や受講生からやり方を学びつつ共同で進めるが、風で飛ばされて一からやり直しとなるなど屋外ならではの大変さもある。

播種や苗定植から収穫までさまざまな農作業を体験した。

また昨年度同様、社会調査手法のトレーニングを兼ねて、農作業の参与観察やおもやスタッフへのインタビューをおこない、農福連携の現実やおもやの方々の思いを学びました。参与観察は、受講生に記憶やメモをもとに作業の模様などを詳細に文字化したフィールドノーツを作成してもらうものでした。またおもやのスタッフ４名にインタビューし、それぞれの経歴や、農福連携事業の現状、課題とそれに対する思いなどを聞き取りました。一部のインタビューでは、録音からの文字起こしもやってもらいました。受講生は、普段の農作業では話題に上がらない福祉の課題を当事者からリアリティをもって学びました。

おもやスタッフの方々におもやでの経験や農福連携などについてインタビューを行った。

普段の農作業や社会調査法の実践トレーニングに加えて、農福連携、おもや、そしてこの実習について幅広く知ってもらうための活動にも力を入れました。おもやで収穫した大麦を、受講生が選別、洗浄、焙煎し、7 月 7 日に瀬田学舎でおこなわれた社会共生実習活動共有会で麦茶にして参加者に提供し、実習活動について認知向上を図った。

また、地元での活動認知向上を図るため、栗東市内の大宝神社が毎月 1 日に開催する朝市におもやスタッフと利用者とともに 7 月 1 日に出店し、麦茶をふるまう予定だったが、悪天候で朝市が中止となった。大宝神社朝市には 10 月 1 日も参加する予定だったが、残念ながらこの日も悪天候で参加中止となった。最後に 12 月 1 日の朝市には出店はできなかったものの、受講生が立ち寄り地元の方々と会話したり焼き芋を楽しんだ。

大麦の選抜、洗浄、焙煎までおこない、麦茶として活動共有会で参加者に提供した。

おもやが出店した地元の大宝神社の朝市に立ち寄った

さらに後期のメインイベントとして、瀬田学舎にて本学関係者に農福連携とおもやについて知ってもらうため、11 月 24 日におもやのさつまいもを使った焼き芋などを販売するマルシェを開催した。受講生が農福連携やおもやの紹介チラシやポスターを準備し、おもやで準備した焼き芋、スープ、焼き菓子などを、おもや利用者、スタッフとともに受講生が 1 号館前で販売した。販売場所の設定や必要な資機材の準備は、受講生が学内関係部局との相談や支援を受けながら進めた。活動共有会でもふるまった麦茶を温かい飲み物としてふるまった。多くの教職員や学生が訪れて商品を購入していくなかで、農福連携やおもやについて知ってもらうためというマルシェの趣旨を受講生たちが説明していった。

瀬田学舎でのおもやマルシェの模様

（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

おもやの利用者やスタッフにも入れ替わりがあり新しく加わった方々もおられる中、これまでの実習活動を通じて長く働いておられる方々とは顔見知りとなり、コミュニケーションもとりやすくなってきました。今年度初めて受講した受講生は当初、障がいを持つ利用者とコミュニケーションがとれるのか不安を感じているところもあったようですが、多くの利用者と普通にコミュニケーションがとれ、むしろ積極的に話しかけることの重要性を認識したようです。その他、普段なじみのない農作業の大変さと同時にその楽しさに気づくことも多かったようです。

他方、今年度の実習でも課題がいくつか見出されました。1 点目は、特に夏期の屋外作業時の安全確保です。近年、温暖化が進んだ影響で午前中から気温が非常に高くなり、熱中症の危険が高まっています。実際受講生が夏の作業時にダウンしたことがありました。受講生は頑張って作業をしてしまうので、担当教員として十分に注意を払う必要性を改めて認識するとともに、受け入れ先と相談して来年度の夏期は屋外作業を避けてインタビューなど社会調査実践を実施する予定です。また、課題というより屋外での活動を伴う実習のやむを得ない弱点として、天候に影響されやすいことが上げられます。今年度は、地元の神社の朝市参加を予定していたものが、2 回とも天候によりキャンセルとなりました。

2 点目は、昨年度も同じ課題が出ましたが、おもや以外の場所への交通手段の確保が難しいことが上げられます。3 点目は、これも昨年度と同様の課題ですが、座学的な学びと現場活動との関連付けが不十分なことです。農福連携や社会調査手法に関する文献資料は数多く存在しますが、現場活動での学びを深めるには、それらを幅広く読み、理解しておく必要があると考えられます。

（4）受講生の感想

受講生数名の多くの感想で挙げられた困難や葛藤で特に目立ったこととして、農作業の大変さについての認識があります。「正直、農業の業務はそんなに大変なものではないと軽視していた節がどこかあった。しかし、実際に農業を体験してみて、想像以上に大変であると実感した」、「[農作業が] 想像以上に大変だということも分かった。ビニールハウスのビニールをかぶせる作業は風があると飛ばされそうになることや、無農薬で育てるため、手間がかかることは実際に作業をしなければ分からなかったことだった」といった感想に代表されるが、特に「夏場の作業は本当に過酷だった。」ことを指摘する向きも多く、夏期の暑熱は危険なレベルでした。担当教員として危機感を持ち安全管理に万全を尽くす必要性を感じています。

また、もうひとつの目立った感想は、障がい者とのコミュニケーションに関するものです。「このプロジェクトを選んだもうひとつの理由として障がいのある方と関わってみて彼らについて理解をしたいと思ったからだ。正直、私は障がいのある方との関わり方に自信がなかった。いままでしっかり向き合って関わったことがなかったからだ。」との感想

にみられるように、今まで障がい者と直接コミュニケーションをとる機会が少なく、不安を感じていたものの、実際に一緒に作業をしたり話をしたりといった経験を通じて、すぐになじんでいったようです。

また周囲への影響として挙げられることとして、受講生がおもや利用者のコミュニケーションのきっかけとなることもあったようです。たとえば「2 年目になる中で、前期では農福連携の取り組みを知ることや利用者と交流を深めることを目標として取り組んだ。おもやの活動として、今年から新しく入ってきた利用者が数名いて、その方に話を聞くと「農業について興味を持ち、自分でも農業をしたい」とおっしゃっていた。」といった体験に示されるように、まだ経験の浅い利用者の方が外部者である受講生とつながりを築く契機となったこともあったようです。

再度に、受講生自身の変化や感じた成長としては、やはり継続的に受講したことで向上したスキルや態度を挙げる例がありました。「自身の成長について、今年は自分が 2 年目の受講生という立場であったこともあって、今年初めて農福連携プロジェクトに参加したメンバーに作業のことを教えたり、自分から全体に作業分担の提案をしたりしたことである。昨年度の経験から次の動きや、どのようなことをしたら良いのかが予想して動けたということが自信につながり、その結果行動にも現れたのではないかと考える。また、インタビュー調査の場面においても自分から質問を切り出したり、インタビューさせて頂いた話からさらに派生させて質問したりすることができて、先生から「去年よりも質問できてたね。」と言って頂いた時にも昨年度よりも成長しているのではないかと感じた。上記のことも踏まえて、今期の社会共生実習を楽しく取り組むことができたことが何よりも良かったと思う」との感想のとおり、やはり実習という経験を通じた学びが明確な成長の自覚につながっているようです。

ポスター

社会共生実習　農福連携プロジェクト
～農業と福祉を通じて広がる地域の輪～

1.　農福連携とは何か？

○農福連携
『障がい者の方に農業に参加してもらうことで、社会への参加を促進する取り組み』

→　農業の高齢化による人手不足の解消　　（農業面）
→　障がいを持つ方の働く場所を増やす　　（福祉面）

➡ 地域の多様な関係者とつながり生き生きと暮らせる共生社会の実現を目指す！

２．　実習の受け入れ先について

○**NPO縁活 おもや**
障がい者、高齢者、生活困窮者らが農業に携わる「農福連携」を実践している。自然栽培で野菜を育てており、育てた野菜を使った料理を”オモヤ キッチン”で提供している。

☆ **おもやでは、農福連携を通じて特に地域の方々との　繋がりを築くことを大事にしている！**

3. 1年間の主な活動

大宝神社の朝市に参加しました！

活動報告会で提供する麦茶を作りました！

さつまいもの収穫など、いろんな農作業を体験しました！

4. 農福連携を知ってもらうために

○11/24（金）　龍大オモヤマルシェ　開催

龍大瀬田キャンパス1号館前でマルシェを開催しました！

こだわりのクッキーや焼き芋、スープを販売しました！

おもやのこと、農福連携のことを知ってもらうためにポスターの展示をしました！

協力してくださったおもやの利用者さん

たくさんの方に来ていただきました！

5. 学んだこと

- 利用者との会話の大切さ
- 利用者の「やってみたい」を大切にする考え
- 農作物を育てるだけでなく、育てるまでの作業や出荷するための作業もあり、手間がかかっているということ
- それぞれのペースを尊重しあいながら作業する大切さ

担当教員 ： 坂本清彦
チームメンバー ： 池野史哉　法戸孝義　吉田楓都　池崎美結　池田爽冴　曽我弘斗　高嶋大晴　黄顕栄　岡本祐季

お寺の可能性を引き出そう

ー社会におけるお寺の役割を考えるー

担当教員：猪瀬優理・古莊匡義

（1）取り組みの趣旨・目的

本実習は、寺院を中心にした地域社会でのさまざまな活動をテーマとする実習である。その活動には、寺族が主催する活動だけでなく、仏教の信仰をもつわけではない個人や団体がお寺を拠点にしておこなう活動や、お寺と協働しておこなう活動も含まれる。

近年の少子高齢化や過疎化の状況の中で、檀家との関係だけでは維持できないお寺がますます増えており、葬儀の簡略化などを受けて、仏教の存在意義が問われる状況になっている。また、お寺は全国にコンビニよりもたくさんあるが、必ずしも門信徒以外に門戸を開いているわけではなく、とりわけ若者からは入りづらい場所、縁遠い場所として捉えられている。

そのようななか、檀家に限らず、地域とのつながりを重視し、こども食堂や高齢者向けのサロンなど、地域のつながりや居場所を作るためのさまざまな社会活動をお寺がおこなうようになってきている。また、地域住民をはじめ、お寺や仏教と深いつながりをもたない人も含めた多くの方に門戸を開き、さまざまな方や団体にお寺を活動拠点として場を提供するお寺も増えている。お寺は、仏教の信仰をもつ人にももたない人にも社会活動の拠点となる可能性を秘めている。

そこで、本実習では、地域社会とつながりを深めているお寺の活動に参画することを通して現代社会におけるお寺の可能性を体験的に学び、さらに受講生自身が調査や企画を実施することを通してお寺の可能性を引き出すことを目指した。

前期は本願寺（浄土真宗本願寺派）および地域に根ざした活動をおこなっている複数の寺院を訪問して活動に参加したり、ご講演をいただくことで、地域におけるお寺の役割や可能性について体験的、主体的に学ぶことを目指した。また、毎週の学内実習の時間では、学外実習の事前・事後学習をおこなうとともに、大谷栄一編『ともに生きる仏教――お寺の社会活動最前線』（ちくま新書、2019）を講読しながら、お寺の社会活動の実際について学び、議論をおこなった。

夏休みはオープンキャンパスでの報告会で前期の学びをまとめて発表するとともに、前年度から継続して検討してきた企画として、一念寺（京都市）を拠点にして「ご縁で繋がるフォトラリー」を開催した。

後期は、前期に学んだことを踏まえて、3つのグループに分かれて実習先寺院で企画や調査をおこなうことを通して、現代におけるお寺の可能性について考えることを目指し

た。また、学内実習の時間には、受講生の企画や調査の準備をおこなうとともに、お寺に限らず、現代の日本社会において諸宗教がどのような意義や可能性をもつかを考えるため、堀江宗正責任編集『現代日本の宗教事情〈国内編Ⅰ〉（いま宗教に向きあう 1）』（岩波書店、2018）および西村明責任編集『隠される宗教、顕れる宗教〈国内編 II〉（いま宗教に向きあう 2）』（岩波書店、2018）の 2 冊を講読した。（古荘匡義）

（２）2023 年度の取り組みの紹介

【前期の取り組み紹介】

①教員企画による講演・フィールドワーク

前期は、教員が企画した講演の聴講、フィールドワークへの参加を通じて、地域社会における寺院のあり方や実際の寺院における諸活動について学んだ。

4 月 30 日には、草津市にある西方寺が開催する「花地蔵祭り」に参画させていただいた。西方寺では、地域住民・檀家さんに向けてお寺の存在感を高めるためのさまざまな取り組み、活動を継続的に実施している。参加させていただいた「花地蔵祭り」はお寺の境内や墓地のスペースと設備を利用したピアノを中心としたコンサートやキッチンカーの出店、抽選会などで構成される賑やかなお祭りである。お寺主催の当日は、駐車場の案内（お祭りかお墓参りかを確認して場所を指示する）と駄菓子屋の店番を交代で担当することとなり、最後の会場の片付けにも参加させていただいた。駄菓子屋の店員として一部ではあるが、最初のフィールドワークでスタッフとして参加させていただいたことは、地域におけるお寺の活動の可能性について肌感覚で知る良い機会となった。

5 月 14 日には、京都市明覺寺で開催された「こども食堂」に参画させていただいた。明覺寺はお寺主催でフリースペースの提供などの独自の活動を多彩に実施しており、開催前にご住職からお寺の取り組みについてのお話しを伺う時間もいただいた。「こども食堂」は明覺寺のご住職が地域の社会福祉協議会にお寺の活用を相談したところ、「こども食堂」の活動場所を探していた「いただきます会いっしょに食堂」を紹介され、場所を提供する形で継続的に実施されている活動である。受講生たちには、食事の前の時間に子どもたちと一緒に遊ぶ役割を与えていただき、ペットボトルボーリング、シャボン玉、スーパーボールすくいなどの遊びを参加した子どもたちと一緒に楽しんだ。お寺自体が、別の団

体の活動場所として開かれる可能性の高さを学んだ。

5 月 20 日には、浄土真宗本願寺派「こども・若者ご縁づくり推進室」のご協力を得て、本願寺「親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要記念龍谷総合学園のつどい」に参加させていただいた。全国の龍谷学園に通う中高生が一堂に会しての盛大なつどいである。「若者」に向けたこの会合に参加したことで、お寺と若者をつなぐことの重要性に受講生たちは気づき、多くを学んだようである。

5 月 26 日には、浄土真宗本願寺派「こども・若者ご縁づくり推進室」の弘中貴之室長（当時）から、現代社会におけるお寺の社会的な役割についてや浄土真宗本願寺派における取組に関するお話しを伺った。大きな社会変動の中での人びとの暮らしの変化を見据えた、スケールの大きなお話に、受講生たちも大きな感銘を受けた。

6 月 3 日には、守山市にある覚明寺にて、お寺主催で開催された「みんなの笑顔食堂」に参加させていただいた。地域に住む人びとを対象に開かれている取り組みで、ご住職・坊守様の簡単なお話も聞かせていただいたほか、子どもたちと一緒に遊ぶ役割も与えていただいた。お寺が地域の方々の交流の場や子どもたちが楽しめる安らぎの場」となる可能性を実感させていただいた。

これらの活動を受けて、前期の仕上げとして、学生自身でお寺で社会的活動を実施され

ている方からの講演会と後期の活動に向けて学んでみたい活動をしている寺院におけるフィールドワークを受講生たち自身で企画することとなった（猪瀬優理)。

②学生企画による講演・フィールドワーク

＊NPO 法人　やんちゃ寺　代表・佐藤すみれ氏　講演　　鳳　惇恵

前期に外部講師として NPO 法人やんちゃ寺の代表として佐藤すみれ氏に実際に龍谷大学瀬田学舎に来てもらい、お話を伺った。すみれ氏の活動に興味を持ったのは、お寺という場所は誰でも来やすい、憩の場になりうると私は考えており、実際にその憩の場として活用されているということからお話を聞いてみたいと思った。

実際にお話を聞いてみて、このやんちゃ寺に来る人たちにとってお寺は第三の故郷のような存在であると分かった。家庭環境などさまざまなことがあり、グレてしまう、非行に走ってしまう人が、このお寺というある種特別な空間では、見栄を張らず、のびのびとできることがわかった。少し非日常的な空間がお寺で作られており、普段は反抗してしまう人たちでも、ここでならありのままの自分でいられるのではないかと思った。

このやんちゃ寺での活動を聞いて、もっとお寺を身近であり、頼っていい存在であるということをたくさんの人に認知してもらうと同時にこのような活動をするお寺が増えていったらいいなと思った。

＊浄土宗知恩院　サラナ親子教室　フィールドワーク　　瀧村　奏那

前期にフィールドワークへおこなったお寺で、子どもたちをターゲットとした取り組みをおこなうことで、お寺に行くということを習慣づけることができたり、子どもを見守る大人たちがお寺に来るようになったり、お寺に対する敷居の高さの意識を和らげられることにより、お寺がより地域に根差した場所になるといったことが期待できるということを学んだ。サラナ親子教室に参加させていただき、子どもたちにお寺に来てもらう取り組みをすることで期待していることや、今後お寺が地域にとってどのような役割や存在を担っていく必要があるのかなどについての学びを深めたいと考えた。

私たちがサラナ親子教室に参加させていただいた日は、「地蔵盆」だったため、教室では縁日で遊ぶ活動がおこなわれた。ヨーヨー釣りや紙コップの魚釣り、ペットボトルバーリングなどの出し物のお手伝いや教室の見学をおこない、またサラナ親子教室やおてつぎ運動についてのお話を聞かせていただいた。縁日の出し物には、簡単に遊べるものからパズルや工作などのあえて少し難易度の高いものも用意されており、幼児から小学校低学年のさまざまな年齢のお子さんが楽しめるように、親御さんと協力して遊べるようにといった工夫がされていた。また、遊んだりご飯を食べたりしつつ、珠数繰りや木魚をたたきながらお念仏を唱えたりする時間を作ることで、親御さんとの楽しい時間を過ごしながら教えにも触れてもらえるよう工夫されていることがわかった。

また、サラナ親子教室についてお話を伺ったところ、サラナ親子教室は、親御さん同士がつながり子育てについての思いを打ち明け合うことのできる場、お子さんが親御さんと一緒にゆったりとした幸せな時間を過ごすことができる場、幼いころから仏教に触れることでその教えが自然と日常の一部となるような場の提供をおこない、親子に『やすらぎ（サラナ）』のある時間を過ごすことができるよう取り組まれているということがわかった。サラナ親子教室は小学校低学年で卒業となり、小学校４年生から中学校３年生までの間はおてつぎこども奉仕団としてより深く教えに触れ、大学生になったときにおてつぎこども奉仕団指導員として教えをつないだり、今度は親として子どもと一緒にサラナ親子教室に参加する、また、インストラクターとして親子教室を運営するなど、生涯を通して仏教に触れる機会をつないでいくことができるよう活動をおこなっているということである。また、仏教離れ・お寺離れが進んでいる世代もお寺の教えを受け入れやすいように、お寺の本来持っている大切なものは変えることのないよう守りつつ、若者世代の意見も取り入れて時代の変化にも対応しながら教えを広めるための取り組みをおこなわれているということがわかった。サラナ親子教室は、インストラクター講座を開催し、知恩院だけでなく全国のお寺で開催できるよう取り組みがおこなわれているそうである。

サラナ親子教室を含め、『おてつぎ運動』はお寺離れという課題へのアプローチだけでなく、核家族世帯や単身世帯が増加し、地域の人同士のつながりが希薄になってきている中で、悩みを打ち明けたり、交流の輪を広げていくことができる機会をつくるという役割も担っているということを学ぶことができた。また、この実習を通して、一時的ではなく生涯を通して、ある一部の地域だけではなく全国の地域で仏教の教えに触れることや地域の人がつながることができるために取り組むことの必要性を学ぶことができたと感じる。

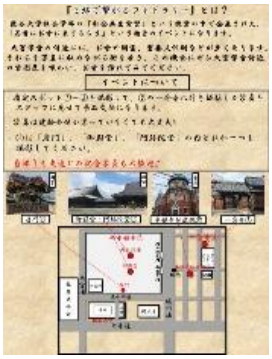
【夏期休暇中・後期の取り組み紹介】

①ご縁で繋がるフォトラリー　　北川　隼士

8 月 27 日に、龍谷大学のオープンキャンパスにあわせて開催した。龍谷大学大宮キャンパス（京都市）付近の街並みを知れるようにキャンパス周辺のお寺やお寺に関係する建造物をチェックポイントに指定し、それらの写真を撮影することで景品が得られるイベントとした。

ターゲットはオープンキャンパス参加者の高校生でありこのイベントに参加することで

お寺に訪れる機会、お寺について考えるきっかけを作ってほしいという想いで実施した。



②西方寺グループ **西方寺グループ**

実習先である西方寺は、お寺を身近に感じてもらうために敷居を下げる活動をされていた。わたしたちのチームでは、西方寺で 11 月 11 日に開催された「西方寺 1111 年祭り」に参画させていただく中で、大学生としてできることは何かを考えた。その中で実際にお寺に来て、イベントを楽しんでもらうだけではなく、お寺について知ってもらい仏教とはどういうものかを感じてもらうことを課題とした。西方寺からのご提案もいただき、具体的には「お釈迦様にかなえてほしい願い」というメッセージボードを会場内に設置した。

③明覺寺グループ **橘　愛帆**

若者世代が気軽に親しみや興味を持ってお寺に足を運んでもらえるように、「お寺でおうちカフェ」の開催を考えた。開催にあたり、お寺と地域住民を繋げる場として前期にお世話になった京都の明覺寺さんにご協力をお願いした。このような企画にしたのは、お寺のゆったりとした雰囲気を生かしたカフェがあれば、敷居の高さが緩和されるのではないかと考えたからだ。明覺寺さんの周辺地域にあるコーヒーショップの豆を使用したドリンクや近隣の洋菓子店の商品を提供することを検討した。さらに、若者世代に人気がありそうなダルゴナコーヒーや抹茶ラテなどのドリンクの提供も考えた。保健所と連携を取り衛生面に考慮しながら試作もおこなった。来てくださった方が写真を撮り、SNS などを通してお寺での取り組みの情報を周りの人にも広げていただけるよう、盛り付けや容器などの見た目も意識した。

④僧侶聞き取りグループ **北川　隼士**

これまで学生はお寺と協働しながら現代におけるお寺のあり方について考えてきたが、お寺の最終的な目的や我々学生に何を求めているかを詳しく聞く機会がなかった。そこで「お寺の最終的な目的」と「学生に求める活動内容」について、複数のお寺関係者の方々へ聞き取り調査を実施した。

（３）2023 年度の取り組みの成果と課題

【夏期休暇中・後期の各グループの取り組みの成果と課題】

①ご縁で繋がるフォトラリー **北川　隼士**

参加者のほとんどが、元々お寺巡りをおこなっている、お寺のような歴史・芸術的なものに興味のある人たちであった。また、お寺に関して特に嫌なイメージを持っているわけではないが、街中の小さなお寺については見学や雰囲気を楽しむために気軽に訪れることができるようなイメージはなく、敷居が高くて近寄りづらいという声があった。

お寺に興味の無い人にお寺に注目してもらうためには、流行の活動やお寺の活動が合う人に参加を呼びかけるなど、今後もさまざまな活動をおこないトライ・アンド・エラーで活動を長期的におこなうことが必要であると考えた。実習では長期の活動は困難であるが、短期間での革新的な企画を提案することも難しい。そのため、社会がお寺に何を求めているのか調査をおこないお寺の活動方針を決める参考データを取ることや既存のお寺の活動の手伝いをおこなうのが、大学生とお寺双方にとって利益のある活動であると考える。

②西方寺グループ **荒井　陽斗**

今回「お釈迦様にかなえてほしい願い」というメッセージボードを通じて実際に仏教に触れてもらうことができたと感じている。そして今回の目的である「お釈迦様の存在をソフトに知ってもらう」ことが達成できていたと思う。しかしお寺やお釈迦様を身近な存在として感じてもらえた一方で、実際お寺が何をするところなのか、お釈迦様がどのような存在かなどを詳しく知ってもらうことができていなかった。そのためこれらを伝えることが課題であると考える。

③明覺寺グループ **橘　愛帆**

結論から言うと、後期の期間でイベントを実施することはできなかった。しかし、企画の話し合いや開催に向けた準備など、実施までの過程で得られたことを成果として示すこととする。話し合いの段階で、企画を進めるうえで自分に何ができるのか、自分がするべきことは何か考えながら、積極的に意見を出すことができたのが成果のひとつである。また、やるべきことがある程度簡潔に見えてきた段階では、メンバー全員が役割分担して進める必要がある。試作に必要な材料を準備する人、メニュー表とレシピをまとめる人など、メンバーそれぞれ自分ができることを見つけたり、得意なことを率先したりすることができた。しかし、連携先の寺院や保健所とのやり取りに関してはグループのメンバーひとりに任せてしまい、負担をかけてしまったことが反省点である。外部とのやり取りは緊張感とプレッシャーが生じるものであるため、より細かく分担すべきであった。今後の団体活動において一人ひとりの役割分担はもちろんのところ、その役割の負担の大きさも考慮することが課題である。

④僧侶聞き取りグループ **北川　隼士**

「お寺の最終的な目的」は教えを広めることであって、門徒を増やすことではないことが分かった。そして「学生に求める活動内容」は最終的な目的である教えを広めるような難しいことではなく、お寺や宗教へ興味を持つきっかけとなるような活動を期待されているため、学生がお寺について考えるきっかけを誰にどのように与えるかを考え、実践することが課題である。

（4）受講生の感想

①西方寺グループ **磯貝　佑樹**

1. 後期の活動では主に、11 月に開催された西方寺 1111 年祭りの西方寺さん側との調整と学生企画の発案、その後の副住職の牧氏とのヒアリングをおこなった。西方寺 1111 年祭りの開催について先生からの紹介があり、それに乗らせてもらう形となった。前期でも花まつりでのボランティアとして参加させていただいた。その時に参加者が子ども中心で、駄菓子屋や抽選会など、子どもが喜ぶイベントを開催していた。1111 年祭りも参加者の年齢層が同様になるということで、低年齢の子どもでも楽しめる工夫を企画に施すこととした。

学生企画としておこなったのは、来訪者に付箋を渡し、「お釈迦様にかなえてほしい願い事を書こう」というテーマで自由に願い事を書いてもらい、それを大学から持参した立て看板に貼り付けることであった。低年齢の子どもでも書くことが理解しやすいように分かりやすいテーマとし、ボードの文字にフリガナをふった。また開催日の 11 月 11 日はポッキーの日ということで、書いてくれた人たちにポッキーをプレゼントした。これらは低

年齢の子どもたちに、理解しづらい「仏教のお釈迦様」という存在について、少しでもソフトに知ってもらえたらいいと思い企画したものだ。

学生企画以外の活動としておこなったのは、車での来訪者向けの駐車場誘導や抽選会のくじの作成、いすや机などの後片付けだ。前期で花まつりに参加した時と同一の活動もある。これらの活動は西方寺さん側のサポートもあり、順調に進んだと思う。

2. 子どもたちに理解しづらい「仏教のお釈迦様」という存在について、少しでもソフトに知ってもらうことを目的として企画した学生企画、私としては 7 割 5 分ほどの満足感でいる。この企画においてよかった点は、子どもたちだけでなく大人の方、特にお年寄りの方も願い事を書いてくれたことである。「自分の願い事を書く」という企画のシンプルさが功を奏したように思う。そのおかげでボード設置直後からたくさんの人に書いてもらえ、早い段階で表面が付箋で埋まった。一方今ひとつ至らなかったと思う点は、私たちがもう少し子どもたちにお釈迦様について説明できたのではないかという点だ。私は何度かボードの設置してあった場所で願い事を書いている子供たちを観察していたのだが、その場所ではあまり子どもたちとコミュニケーションをとらなかった。ここでもっと書いてくれている人と話したり、お釈迦様について説明していれば、もっと実りある成果が得られていたかもしれないと少し後悔している。

その後の副住職の牧氏とのヒアリングでは、西方寺さんで定期的におこなっているイベントの今までの取り組みや地域とのつながりの深さを知ることができた。私が学生企画を実現することができたのは、西方寺さんの協力だけでなく地域住民の方々の理解があってこそのものであると実感している。

3. 後期の学生企画に向けて活動している中で、目立った困難や葛藤はなかった。それは偏に、学生企画の実施を快諾していただいた西方寺さんと私に協力してくれた実習のメンバーたち、実習の先生のおかげである。ボードの飾りつけや作成も実習のメンバーたちと分担し、何とか形になるものを作ることができた。西方寺さんとの連携も、先生のサポートによって結果的に円滑に進んだ。

4．前期の活動では先生に提案してもらった実習先に私たちが向かい、お手伝いしたり主催者の方に話を聞く、受動的な活動が多かった。しかし後期はメンバーが中心となって実習先やその実習でやることを決めなくてはならなかったので、実習先へのアポ取りや学生企画実施の相談など、先生のサポートを受けながら進めていった。それらの活動を終えた今、頑張ってよかったと思う。もちろん自分自身の行動や提案が 100 点であったわけではなく、もっと良い方向にできたと思う点はいくつかある。それでも入学して以来、授業を受けて淡々と課題や試験をこなすだけだった大学生活で初めて、自分で何をするかをメンバーたちと決めて、その実現のために動くという経験ができた。大学生活の限りある時

間を有意義に充実させることができた。社会共生実習を受講しようと思ったのも、友達の勧めという些か消極的な理由だったが、受講する選択をして正解だったと感じる。最後に、社会共生実習でお世話になった実習先の方々、先生、一年を共にしたメンバーたちに感謝したい。

②明覺寺グループ **瀧村　奏那**

1. 後期に携わった活動の概要

私は、後期では「お寺でおうち cafe」という企画に携わりました。この企画は、前期にフィールドワークに伺った京都市にある明覺寺で地域の方々や私たちと同世代の若者をターゲットにしたカフェを開催するというものです。カフェでは、明覺寺周辺のお店のコーヒー豆を使用したホットコーヒーや焼き菓子、若者人気の高そうな抹茶ラテやダルゴナコーヒー、和紅茶などの手作りドリンクの提供をおこなう予定でした。

（1）携わった活動についての自分なりに理解している目的・課題

若者世代をターゲットにしたこの企画を開催しようと考えたのは、前期のフィールドワークでさまざまなお寺の住職の方々からお話を伺ったところ、地域の方に足を運んでいただくための取り組みをおこなっている背景には、現在、特に若者世代のお寺離れの進行が深刻であるという課題があることがわかったためです。また、その課題にアプローチするために、乳幼児や小学生のお子さんをターゲットにし、幼いころからお寺に行くことを習慣づけることで若者のお寺離れを防ぐ取り組みをおこなっているお寺は多かった一方で、大学生や 20 代の若者を直接ターゲットにした取り組みはあまりおこなわれていないように感じたため、この企画を実施し、若者世代にもお寺に足を運んでもらえる機会を作りたいと考えました。

（2）携わった活動を企画・運営するなかで自分が担った役割

この企画では、メンバーの全員でメニューの種類を提案し、工程表を作成してメニューの決定をおこないました。また、私個人としてはドリンクの材料と、作成するために必要な機材、その他おしぼりや紙ナプキンなどカフェの運営に必要となるものの買い出しを担当しました。試作をもとに使いやすさを考慮しながら、できるだけ経費を抑えられるよう安価なもので代用するなどして必要なものを購入するようにしました。

2. 活動の成果の概要

この企画は開催、正式な宣伝の実施には至りませんでしたが、ドリンクメニューを決定し試作を実施する段階までの活動をおこないました。その段階に至るまでの成果としては、カフェの開催場所として明覺寺にご協力をいただいたこと、衛生面に考慮し、安心してお菓子やドリンクの提供がおこなえるように保健所との連携をおこなったこと、地域の

ことをより知っていただける機会となるように周辺地域のコーヒーショップやケーキを販売しているお店に協力して頂きたいと考えていることなどがあります。また、社会共生実習の活動報告会で企画の趣旨や取り組みについて他のプロジェクトの方に伝えることで、現在のお寺の課題やそのための取り組みについて興味を持っていただけたのではないかと考えています。

3. 活動するうえで直面した困難や葛藤

一つ目の困難は、保健所から学生主催のカフェであるため衛生上の理由から、手作りのメニューはドリンクのみしか許可を得られなかったこと、代表者ひとりが研修に参加しなければならず、そのための費用や時間を設けるのが難しかったことです。二つ目は、メンバーの予定の調整が難しく、ドリンクの試作のための時間をあまり設けられず、制作に不安が多かったことです。三つ目は、若者世代を主なターゲットにしているため、SNS を活用した宣伝を考えていましたが影響力のあるアカウントがなかったため、他の方法で若者に興味を持ってもらう方法を考える必要があったことです。このような困難を解消するための方法を考え話し合ったものの、具体的な解決方法が見つけることができず、企画を開催することが難しかったと考えています。

4. 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

開催に至らなかったため、連携先に対する影響がどんなものであったのか考察するのは難しいと感じます。しかし、後期に 2 回開催された社会共生実習活動報告会で「お寺でおうち cafe」を企画した背景にあるお寺の課題や、開催を目指しておこなっている取り組みやそれに対する葛藤などを他のプロジェクトの受講生に伝えることができ、お寺の持つ地域における役割の重要性や、地域の居場所としてさまざまな取り組みをおこなっていることを知ってもらうことができたように感じます。また、若者世代に向けた企画を考えていることを伝えられたことで、私たちがアプローチしようと考えていた「若者世代のお寺離れ」という課題に取り組むことの必要性を知ってもらえたのではないかと考えています。

5.「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

本プロジェクトに参加するまでは、お寺に行く機会はほとんどなく、お寺に対するイメージは近寄りがたく、少し不気味なところというもので、まさに自分自身がお寺の抱えている課題のターゲットである「お寺離れした若者」でしたが、お寺でのさまざまな取り組みや住職の方々の思い、地域の方の気持ちを知って、お寺は地域の方々にとってとても重要な居場所のひとつとなっていることを実感し、もっと多くの地域の方々にお寺が地域の方々が気軽に集まり交流することができる場所として知ってもらいたいという思いに変わりました。また、フィールドワーク先に実習の依頼をするという経験を初めてして、電話対応で要件を伝えることや、当日の流れの把握をおこなうことの難しさを学ぶことができ

ました。そして、企画の準備を通して、計画立てて進めることや些細なことでも報告・連絡・相談をおこなうことが協力してスムーズに進めるために重要なことだと改めて実感しました。

今後、社会人になったときに自分で企画を考案し、計画・準備・実行をおこなったり、他機関と連絡を取ったり、連携する機会もあると思うので、学んだことを生かすことができたらと思います。また、卒業後は福祉分野の仕事に携わりたいと考えており、やんちゃ寺の取り組みや子ども食堂などの活動を学んだので、お寺と社会福祉を結び付けた取り組みができたらと思いました。

③僧侶聞き取りグループ **北川　隼士**

私の後期の活動では、今までおこなわれてきたお寺での活動についての考えをご住職にインタビュー調査をおこなった。目的は、自分たちが今までおこなってきたお寺の活動を手伝う取り組みや新たなお寺での活動企画を提案・実施するといった学生の活動は、お寺側にメリットのあることだったのか、お寺が目指す活動の最終目的は何なのか、またその目的達成のために学生ができることとは何が考えられるのかについて調べることであった。このインタビュー調査を通して、今後実習をおこなう学生のお寺へ提案する活動の方向性を示したいと考えて今回の調査をおこなった。

「学生の活動がお寺側のメリットになっているのか」については、お寺が若者を受け入れる際、若者の意見やその意見の詳細について知ろうとすることが現代のお寺のあり方を模索しているお寺にとって現在のトレンドについて学ぶ機会になっており、有益であると伺った。また、子ども食堂などでの子ども向けの企画は子どもたちが普段とは違う年上の人と接する良い経験となっており、お寺だけでなく、お寺の活動参加者にも好評であることが分かった。しかし、お寺の活動は継続的な付き合いへの発展を求めているため、実習のように一時的な期間だけで共に活動するのはあまり意味が無いように感じるというご意見も伺った。これらのお話より学生の学生らしい今までの型にはまらない考えというのが好まれているという印象を持った。しかし、お寺に継続的に人が来るようにするといった大きな成果をこの実習で求めるのであれば、学生は長期的な活動や集客やリピーターを獲得するようなノウハウをしっかりと学ぶ必要がある。また、今までにない新しい企画を考えるのではなく、他の成果を出している会社などの活動を分析して模倣から始めるべきである。しかし、そうすると学生には事前に学ぶことや準備期間が今の活動よりも必要となり、実習の負担が大きくなってしまうのではないかと考えた。今まで以上に学生の負担が重くなるとお寺について考えるということのハードルが上がってしまい、我々学生側も世間の人と同様にお寺の敷居を高く感じるリスクがあるが、お寺の今まで以上の利益を考えるのであれば、学生の活動内容が増えるのは仕方が無い。学生側とお寺側、どちらに寄り添うかバランスが難しいと思った。

「お寺が目指す活動の最終目的」については、将来お寺について考える人になって欲し

いというお話と仏教の教えを広めることという 2 つの目的をお伺いした。どちらも改めてお伺いすることで、自分たちは今までにない面白い企画を出すことでより多くの参加者を集めることに執着しすぎて、お寺に継続的に来る人を作ることや仏教の教えを広めるということを見失っていたと思った。学生としては自分の想像力を膨らませて面白い、お洒落な企画を考えるという点に面白さを感じて実習を受講している人も多く、実習内でも明確にこれらの目的を意識した企画制作は指示されないため最終目的を見失いやすいと思った。

「目的達成のために学生ができること」については、お寺側としては短期間で成果が出るとは考えておらず、長期的に今までおこなったお寺での数多の活動がひとつでも思い出として残すことができれば、数年後お寺での活動を思い出してお寺について考え始めるきっかけやお寺を思い出のある大切な場所として認識してもらい、お寺を存続していこうと考える人を増やせれば良いと考えるとお伺いした。このお話より、我々学生の活動は、お寺について考えるきっかけづくりやお寺を思い出のある場所とするための活動のひとつとして意味があると考えた。実習のため長期的に活動することは困難であるが、長期的にやるのは私たちだけである必要はなく、お寺で活動する人たち一人ひとりの活動が長期間の目標のため活動と考えれば、我々学生の活動も目標達成のための貴重な活動のひとつと認識することができ、短期間であるから意味がないと失望する必要はなくなると思った。

今回の調査では、本来お寺側の目的や理想をしっかりと把握、再認識したうえで企画を考えなければならないのに、企画を何度か考えた後にお寺側のお話を聞く必要性があることに気づいたのは順序が逆であり、調査協力してくださるお寺の方から失望されないか、また学生の活動をあまり意味のある活動ではないと厳しいお言葉を頂くのではないかという不安があった。しかし、実際にお話を聞いて自分たちの活動は無駄で無かったこと、自分たちが目的を見失っていたという過ちとなぜそのような状態に陥ったのか分析することができたので、今までお寺に関する色々なことに関わってきたこのタイミングだからこそおこなって良かった活動であると思った。

今回の活動によって周りや連携先への変化は無かったが、今回の活動報告がこれからの実習生や学生と連携するお寺の活動の助けとなるのではないかと考える。

「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長は、企画を考えるということはとても魅力的な活動ではあるが、画期的な企画を考えることにばかり意識して本来の目的を見失ってしまうことがあること、企画は目的を達成するための手段であってアイデアコンテストではないことを理解し、企画とはどういうことなのかを再認識することができたことである。目的を設定していても、効率や面白さなどそれを達成する際の追加要素にばかり集中してしまうことは自分の身の周りの生活色々なことにも当てはまることだと思うので、今回での学び「目的を見失わない」ということを意識して今後の活動をおこなっていきたいと思う。

ポスター①

『西方寺～1111年祭り～』

鳳、磯貝、荒井、非々、寺田

イベント内容

11月11日（土）10時～19時30分

・キッチンカー、駄菓子屋、ストリートピアノ、子供向け抽選会の実施、お地蔵様の出開帳、伝説の本堂ライブ

13店舗もの店が出店！

プロの音楽家も参加！

子供をターゲットにすることでその友達や両親、祖父母の参加も促せる！

活動目的

①お寺に来てイベントを楽しんでもらう
②お寺について知ってもらう
③仏教とはどういうものなのかを感じてもらう

活動内容

・メッセージボードの設置

「お釈迦様に叶えて欲しい願い」というテーマでメッセージをボードを設置した

お金持ちになりたい！

まとめ

お釈迦様に叶えてほしい願い」のメッセージボードを通して実際に仏教に触れてもらうことができ、お釈迦様の存在をソフトに知ってもらえた。一方で、実際にお寺が何をするところなのか、お釈迦様がどのような存在かを詳しく知ってもらえなかったので、今後これらを伝えることが課題となる。

ポスター②

お寺でおうちcafe

森本、橘、侯、南、瀧村

お寺の現状・課題

お寺と地域のつながりの希薄化

若者や現役世代のお寺離れ

お寺に訪れることの敷居の高さ

前期にフィールドワークでお世話になった京都にあるお寺！

計画中の企画

明覺寺と協力『お寺でおうちcafe』

「お寺でおうちcafe」とは？

お寺のゆったりとした雰囲気を生かしたカフェ
周辺地域のお店のコーヒーや洋菓子を提供

企画に対する想い

お寺離れが特に顕著な若者世代を対象に、お寺に足を運んでいただきお寺に触れる機会を提供したいという思いでプロジェクトを立ち上げました。

これまでの取り組み

①保健所との連携
②提供するメニューの考案・試作
③コーヒ店と洋菓子店の調査と協力依頼
④企画の告知

ポスター③

2年間の活動内容について

僧侶聞き取りチーム　北川

1年目後期

・『お寺でオーキャン』について

ターゲットは高校生、特に将来の進路について真面目に考える意識が高い人が参加するとしてこの企画を計画しました。

企画者が高校生の時、オープンキャンパスで現役大学生に大学や受験当時のお話を聞きたくても、広いキャンパス内で人が大勢いる中では大学生との距離を感じてしまい話しかけにくいという経験がありました。そこでお寺という落ち着いた空間、少人数で実施すれば、これらの課題を解決した高校生にとって良い大学について知る機会を作ることができ、またお寺に訪れて知るきっかけになるのではないかと考えてこの企画を行いました。

企画案が固まると大学の先生方や社会共生実習支援室、高校と大学の連携を担当している方に企画内容を説明して実施できるか?広報などに協力してもらえるか？など確認を行い企画実施の許可を得た。

続いては実施場所のお寺探しを行った。今回はご住職が龍谷大学の出身であり、龍谷大学で実際に講師をされている一念寺にてこの企画を実施するに相応しいと思い、ご住職に企画内容を説明と協力依頼にお伺いすると企画に面白さと実現可能な設備が整っていたため快く依頼を引き受けて頂いた。

詳細な実施内容は学部紹介や必須科目である仏教の思想講義体験、ゼミでよくあるグループワークの体験、そして現役大学生への質問会であった。学部紹介やグループワークの内容は学生で作成して、講義資料はご就職に作成して頂いた。

広報について、チラシは学生が作成して、それらの配布については龍谷大学と交流のある高校の進路部の方などに協力して頂いた。

このように準備物については完璧であったが、広報活動が弱く、開催時期が年末期末試験後の開催であったため事前予約制であった企画の参加者は0名で企画は中止となった。

2年目前期

・『ご縁で繋がるフォトラリー』について

1年目のリベンジとしてターゲットや目的は前回と同様で、開催日を一念寺の近くにある大宮キャンパスのオープンキャンパスと同日にしてより集客がしやすい日程で行った。そのため、企画内容もオープンキャンパスと同日開催に相応しいように大宮キャンパス付近の街並みを知れるようにキャンパス周辺のお寺やそれに関係する建造物をチェックポイントに指定してそれらの写真を撮影して歩き回るフォトラリーを企画した。夏に開催ということもあり、冷たい飲み物の配布や景品などの特典を用意して行った。そして、友達同士や親子での参加があり、無事に開催することができた。

参加者に「なぜ参加したのか?」、「お寺に関してどのようなイメージを持っているのか」調査を行った。参加者のほとんどが、元々お寺巡りを行っている、お寺のような歴史芸術的なものに興味のある人たちであった。また、お寺に関して特に危険なイメージを持っているわけではないが、街中の小さなお寺については見学や雰囲気を楽しむために気軽に訪れることができるようなイメージはなく、敷居が高くて近寄りづらいというお話を聞いた。

2年目後期

・『お寺にインタビュー』について

田舎のお寺については、少子高齢化による門徒の減少と新たに門徒となる人がいないことを課題として挙げられていた。

お話をお伺いしたお寺では、子ども食堂を実施しており、定期的にお寺に未就学児～小学校低学年の子どもたちとその保護者が集まっている。この活動の目的として子どもたちの小さい頃の思い出としてお寺で遊び、学んだ経験というのはのちに子どもたちが大人になった際にお寺のことを考えてくれるきっかけになるのではないかという思いで活動されていた。

学生には、子どもたちや若者がお寺について知って考えるきっかけとなるような活動を期待されていた。しかし、これについて難しく考えすぎず、積極的に思いつた活動に挑戦することが大切で、お寺側としては我々学生のような若者がお寺について考えてくれることが、時間があまりなく今までのやり方が定着してしまっているお寺にとって、学生の新しいアイディアはメリットとなっている。

都会のお寺については、最終目的は教えを広めることで門徒を集めることではない。そしていま力を入れて行っている活動は若者に興味を持ってもらうために、お寺の敷居を下げるイベントを行っている。昔はお寺がある場所に人々が教えを求めて集まっていたが、今はお寺から人々に寄り添っていき教えを広めなければ教えを広めることは困難であると考えているようである。課題として時代の動きに合わせて今何に挑戦するべきか現代のニーズに対応に困っているため、学生には現代のニーズにあった考えを求めている。また学生がお寺で活動することのお寺のメリットは、学生の企画実施に向けて動く際にお寺は若者の考えを理解することが必要になり、これはお寺の課題である現代のニーズを学ぶ良い機会となっている。

・まとめ

当初、学生が行っているお寺への新たな活動の提案は、お寺訪問者が一時的に増えるだけで継続的な訪問者確保には繋がらないためお寺に負担をかけているだけでお寺メリットとなっていないのではないかと不安があった。

実際にお話をお伺いするとお寺の目的は教えを広めることや将来お寺について考える人を増やすことであったが、これらはすぐに達成できることではなく、今やるべきことはお寺について知るきっかけづくりであり、我々学生の活動はそのきっかけとしては十分に役割を果たしていた。また、お寺が若者と話して現在のトレンドを学ぶ機会にもなるため学生企画の実施はお寺の場所や時間的負担をかけているが、得られるものもあるため迷惑ではないことが分かった。

これから課題として、我々学生の活動が新たなお寺の活動する人を生み出すきっかけとなり、それがやがて教えを広げる活動となっていくことを学生は意識して、「印象に残る」や「継続的に続けられる」など今後活動が広まることを考えた企画づくりが必要であると考える。

いくつになっても、出かけられる！

～高齢者を元気にする介護ツアー企画～

担当教員：髙松智画

（1）取り組みの趣旨・目的

介護が必要な高齢者の生活問題に関する学習やプランニングの基礎的な学習をするとともに、高齢者へのインタビューから、どのようなツアー企画にするかを検討していく。

そして、下見やプレゼンテーションでのフィードバックを重ねて、企画内容を練り上げていく。

このような活動を通じて、本プロジェクトは、どのような配慮や介助があれば、介護が必要な高齢者の「出かける」ことを保障できるのかを考えるとともに、「出かける」ことを妨げている問題・課題は何か検討すること、さらには、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目的として開講する。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

① 高齢者の生活問題、ツアーの意義やプランニングの方法に関する学習

まず、高齢者への理解を深める学習、生きがいに関すること、外出に関する問題・課題、特に新型コロナウイルス感染拡大による外出機会の減少が生活にどのような影響を及ぼしているかについて学習した。

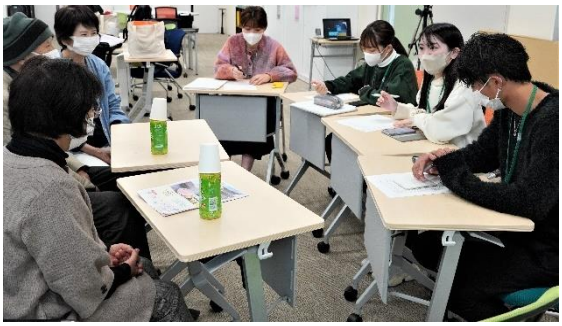
つぎに、「安全・安心かつ魅力ある観光を高齢者や障害者に提示し積極的に外出する意欲を持って頂くことで生活の質を向上させる」ことを目的とし、バリアフリー調査・評価、介護旅行の企画・運営等をおこなっている、「株式会社どこでも介護」の大西氏と橋本氏から、介護旅行の事例や参加者の声などをあげながら、高齢者にとって「出かける」ことの意義や、どのようなプランを作成すればよいかなどについて講義を受けた。

さらに、昨年度の実習で作成したツアー企画書、参加者募集のフライヤー、ツアー紹介動画の閲覧をしたうえで、受講生一人ひとりがどのようなツアーにしたいかについて話し合いをおこなった。また、旅行会社などが販売している高齢者向けツアーに関する情報収集もおこなった。

② 高齢者へのインタビュー

ツアーの対象となる高齢者とコミュニケーションが図れるようになること、普段の生活の中での困りごとや要望などを聞き取ることで、高齢者への理解を深めること、旅行や外出への要望について聞き取ることを目的として、京都市内の通所デイケア施設利用者と大津市内在住の 3 名の高齢者を対象にインタビューをおこなった。

その後、インタビュー内容を全員で共有し、ツアーコンセプト、対象、行先や内容について意見交換をおこなった。



③ ツアーの企画とプレゼンテーション

ここまでの学習と実習をふまえて、受講生それぞれのアイデアから 3 つにグループ分けをおこなった。そして、グループごとにツアープランのコンセプトを考え、下見をおこない、ツアー企画書を作成して持ち寄り、プレゼンテーションするという実習を 2 回おこなった。

2 回目に各グループが提案したプランは次の通りである。一つ目は、近江神宮、びわ湖大津館をめぐる「春香る近江の風雅ツアー」、二つ目は、京都市動物園の見物とみたらし団子作り体験の「目一杯楽しむ！非日常を満喫するツアー☆」、三つ目は、三井寺参拝と清水焼の絵付け体験教室の「見て触れて感じよう！春の三井寺ツアー」である。

各プランのプレゼンテーションをおこない、質疑応答や講師からのコメントを踏まえて実施するプランを決定した（企画書は以下のとおり）。

「見て触れて感じよう！春の三井寺ツアー」

◎ツアーコンセプト

①歴史や文化が感じられるお寺をガイドさんとともに案内

②四季折々の料理と景観が楽しめる日本料理店

③京都の伝統工芸を手軽に体験できる絵付け教室

⇨唯一無二の旅を『カタチ』と『記憶』に残すことができる

◎実施日：2024 年 3 月 17 日（日）

◎タイムスケジュール

10：00　介護タクシーで自宅から現地まで送迎

11：00　三井寺到着

　　ボランティアガイドによる案内で寺院内を散策

12：00　休憩・買い物　移動

12：50　昼食　『疏水亭』

14：20　介護タクシーで移動

14：30　びわ湖大津館にて絵付け体験教室

16：00　体験教室終了　介護タクシーで自宅まで送迎

17：00　帰宅

④ ツアー実施にむけた現在の活動

2 月下旬に連携先である通所デイケア施設で参加呼びかけの時間を設けてもらい、3 回プレゼンテーションをおこなった。現在参加者を募集中である。

3 月初旬に参加申し込み者の移動や食事、トイレの使用などにおいてどのような配慮や介助が必要であるかを詳しく知るために、個別の面談をおこなう予定である。それに基づいてフェイスシートを作成して全員で情報共有を図り、参加者一人ひとりに適した介助ができるよう確認をしていくことにしている。

また、当日までの準備のための役割分担、ツアースケジュール確認のための打ち合わせや実習や車いす操作の練習をおこない、安全に楽しんでもらうためには、どのような準備、実施体制、役割分担が必要かを詳細に詰めていき、ツアー当日が迎えられるよう準備を進めている。

（3）2023 年度現段階での取り組みの成果と課題

プラン作成に先立っておこなった高齢者へのインタビューや学習をふまえながら、何度も企画書を修正した過程から、他者の意見を尊重しつつ自らの意見を主張すること、意見をまとめて形にしていくことなど、多くの学びを得たのではないかと考える。さらには、大学生だからこそ企画できるツアーとは何かを考え、具体的な形にしていくことには戸惑うことや悩むこともあったと思われるが、その楽しさを感じることができたのではないかと考える。

ツアー実施までに参加者との面談、実施直前の打ち合わせ、さらには、「どこでも介護」大西氏、橋本氏からの指導や当日の支援に加えて、通所デイケア施設の運営母体である病院医師による事前の診察やツアー当日の緊急対応支援、通所デイケア施設からの参加者家族への説明、通所デイケア施設職員 のツアー同行といった、ツアー実施のための体制を整えていく予定である。

こうしたことから、ツアー中にどんなトラブル・緊急事態が発生するかを想定し、それらを回避するにはどうすればよいかということを体験的に学ぶことが今後の課題である。そして、参加してよかった、また行きたいと思ってもらえるようなツアーを無事に終えることが、最終的な本プロジェクトの目標である。

ポスター

いくつになっても、出かけられる！
～高齢者を元気にするツアー企画～

社会課題

高齢者の孤立

高齢になるにつれて外出する機会が減り
社会から孤立してしまう

老老介護

介護する側もされる側も高齢である状況
では活動範囲が限られしまう

バリアフリー化の整備

街中ではまだまだバリアフリー化が進ん
でいない場所も多く高齢者の方にとって
も外出のハードルを上げている

インタビュー

川口内科医院通所デイケアと学内交流会にてインタビューを実施

・学生（若い世代）とお話がしたい
・あまり外出ができていないため、遠出に不安がある
・外出時はトイレや休憩時間をこまめに確保する
・車椅子の操作には注意が必要
・食事は消化にいいものを選択する

ツアー企画案

目一杯楽しむ！満喫ツアー☆

◎ツアーコンセプト
「学生と一緒に特別な１日を」

◎ツアーの内容
・京都市動物園を楽しみ、テイクアウトした料理を外で食べる。
・八つ橋庵ししゅう館にて、みたらし団子作りを体験する

W世界遺産日帰りツアー

◎ツアーコンセプト
「非日常をのんびり堪能！」

◎ツアーの内容
・世界文化遺産に登録されている龍安寺と仁和寺を巡る
・御朱印を集め、世界に一つのアルバム作り

見て触れて感じよう！春の三井寺ツアー

◎ツアーコンセプト
「唯一無二の旅を『カタチ』と『記憶』に残す」

◎ツアーの内容
・歴史や文化を感じられる三井寺をガイドの方と案内
・琵琶湖疏水を見ながら四季折々の料理を楽しむ
・京都の伝統工芸を体験

今後の活動内容と課題

《活動内容》

・１月中旬にツアー企画を確定する。
・全体でツアー内容の確認や下見を行う。
・春休み中に、車いすの操作方法を学ぶ。
・ツアーに参加してくれる人を募集する。

《課題》

・参加者を案内できるように、トイレの場所や気をつける場所などを下見の際に確認する。
・車いすを押すことに慣れていないため、当日までに車いすの操作の練習を入念に行う。

障がいをもつ子どもたちの放課後支援

担当教員：土田美世子

（1）取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトは「障がいをもつ子どもたちの未来に向けた共生社会の実現」をテーマとする。プログラムでは、放課後等デイサービス「ゆにこ」での実習を通じて、障がいをもつ子どもたちとの関わり方を学び、子どもたちの未来につながる支援について考える。

一人ひとりの子どもとの関わりを通じて得た理解と共感をもとに、「共生社会の実現のために何が求められるのか」について考察を深め、受講生が共に学びあうことを、プログラムの最終目標とする。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

本プロジェクトは、放課後等デイサービス「ゆにこ」でおこなう週 1 回の実習を活動の核とする、半期（前期）のプログラムである。2023 年度はプログラムを開始して 3 年目となるが、受け入れ先との協議が進み、昨年度の実習先である「ゆにこ神領」・「ゆにこ青地」に加え、「ゆにこ瀬田」でも学外実習を依頼することができた。3 つの事業体は、それぞれ利用する児童の個性が異なるため、学生の志望動機とのマッチングのもと、実習先の振り分けをおこなった。

プログラムは、①「ゆにこ」での実習に関連した学内での学習、②基本的に週 1 回の「ゆにこ」での学外実習、③まとめとしての共生社会実現に向けた考察、の 3 つのパートから成る。基本的には①から③に向けて時系列で学びを進めていくが、実際には①～③を行きつ戻りつしながら学びを深めていく。各パートについて、簡潔に紹介する。

① 学内では、まず、a.障がい特性についての理解、b.応用行動分析を用いた子どもの行動理解、の講義を実施する。また、学外実習開始後は、各自の子どもたちとの関わりの場面を日誌に記述することで振り返り、実習での反省・考察を授業内で受講生が共有し、一人ひとりの子どもの個性、「ゆにこ」の役割について理解を深めていく。プログラム後半では通所児童の保護者からの講話を受け、利用児童に対する家族の思い、家族にとっての「ゆにこ」の役割について、学ぶ機会をもった。

② まず、学外実習のオリエンテーションとして、管理責任者である増田氏より、ゆにこ現地で講話を受け、実習に向けた心構えについて学ぶ機会を得た。

5 月連休明けから開始した「ゆにこ」の実習では、その日の利用児童の受け止めのための職員ミーティングから、受け入れ準備又は送迎の同行、活動への参加、後片付け又は家庭までの送迎への同行・終了時のミーティングまでの、半日～1 日の実習を実施する。活動の中で学んだことや疑問に感じたことは、その場で職員にたずねてフィードバックを得た。また、実習後に「日誌」を作成し、指導担当者からコメントを得ると共に、学内の授業でも日誌を活用して学びを深めた。

最終盤では、ひとりの子どもの支援について「支援計画」を作成し、支援対象児童にとっての「ゆにこ」の役割や、より良い支援について考察を深めた。

③ 学外実習終了後は、実習報告書の作成等のまとめ作業を通じて、共生社会の実現に向けて各自考察を深めるとともに、授業内での報告を通じて学びや考察を共有した。

学びのアウトプットをもとに瀬田学舎での夏期のオープンキャンパスに向けた報告資料を作成し、共生社会形成に向けてのアクションの第一歩として、高校生・保護者に向けてオープンキャンパスでの発題を実施した。

（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

半期のプログラムであるため、学外実習での学びと学内での学びとを効果的に結びつけることは必須となる。3 年目となり、学外実習先との連携は進んだ面もあるが、各事業体での学生の学びに求める水準が異なる面もあり、学生個人のニーズや経験・力量とのすり合わせに、より緊密なコミュニケーションを目指す必要も感じられた。

実習のまとめとなる「日誌」については、フォーマットの工夫・実習先とのやりとりの工夫により、より指導が受けやすい形式とはなった。一方、学生からは「実習翌日の正午まで」という提出期限については厳しい、という声もあり、検討が求められる。

利用児童の「支援計画」の作成は、子どもの立場から、個別の障がいや個性について考え、自分なりの支援について工夫することにつながっているが、作成後のフィードバックを含む扱いについては、実習先との更なる協議が必要であろう。

今年度は、共生実習全体の受講生との「学びの共有」の授業機会の設定があり、受講生にとっては、自分の参加するプログラムの相対化に役立った。プログラムの最終的な目標である「共生社会形成に向けて各自が何をしていくべきか」についての考察が、より「アウトプット」を意識したものになっていたのは、この相対化の成果であると考える。とはいえ、まとめの考察のための時間の確保は、例年同様課題となった。

（4）受講生の感想

近藤　翔太・松下　悠香

①活動するうえで直面した困難や葛藤

実習先で出会った知的障がいのある FYK 君は、発語がなく、動物図鑑を眺める・とんとん相撲をする等、ひとりで黙々と遊んでいる様子だった。自分が興味のない人とは積極的に関わろうとせず、最初はどう関わればよいのか、悩んだ。

車の送迎時に積極的にこちらから声をかけたり、遊びの時間には、ひとりで遊んでいる FYK 君のとんとん相撲に参加したり、図鑑のすきな動物をきくなど、積極的に介入するようにした。そうした関りを続けることで、表情やしぐさなど非言語的コミュニケーションを使って、FYK 君にとって実習生である私との関係作りをすることができた。

②活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

実習を通じて、子どもたちの成長のためにすべてを支援するのではなく、自力でできるように支援をすることが大切だと学んだ。支援するためには、子どもたちを理解することが必要となる。子どもたちを理解するためには、子どもたち一人ひとりを観察し、関わることが大切だと学んだ。子どもは元気な日もあれば元気がない日もある。さまざまな角度から声かけをして、様子を探ることが重要だとわかった。

③「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

障がいのある子どもと関わったことで、障がいは個性であると学んだ。以前は障がいと聞くと、大変そうな印象をもっていたが、個性豊かな子どもたちが、ゆにこでの活動を通じて成長していることを学ぶことができた。

この実習を通して、自分がもっている障がいへの偏見に気付くことができた。子どもたちと関わるなかでさまざまな学びや気づきがあり、無邪気に遊び、地域で暮らす子どもたちを知ることで、障がいについての考えが大きく変わった。相手の障がいを知り、その人自身についてを理解しようとすることが、地域で一緒に生きていくうえで大切にするべきことではないかと考える。（オープンキャンパスでの報告より）

ポスター

RYUKOKU UNIVERSITY

2023年度社会共生実習報告会

障がいをもつ子どもたちの放課後支援

障がいをもつ小・中学生の生活支援、発達・学習支援を実施する「放課後等デイサービスゆにこ」での実習を通じ、障がいをもつ子どもたちとの関わり方を学び、障害をもつ方との共生社会について考えるプログラムです。

ゆにことは

放課後等デイサービスといい、
小学校1年生から高校3年生の
障害がある児童・生徒に対して、
放課後や休暇中の居場所作り
子どもたちの自立を促す役割
をしています

【平日利用】

各学校に送迎にお迎え
↓
ゆにこ到着
↓
はじまりの会
↓
おやつ
↓
すごし(あそび・宿題など)
↓
おわりの会
↓
各ご自宅に送迎

【土曜・学校休業日】

ゆにこ到着
↓
はじまりの会
↓
午前のすごし(あそび・宿題など)
↓
クッキング
↓
みんなでお昼ご飯
↓
午後のすごし(室内活動など)
↓
おわりの会
↓
各ご自宅に送迎

実習の紹介

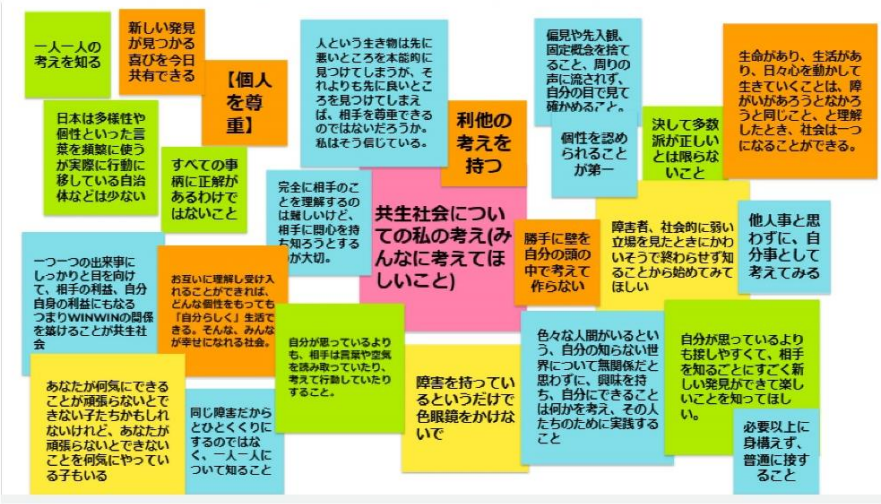
・ゆにこへ帰ってきた子どもたちの受け入れ
・おやつ、宿題、遊びの時間を一緒に過ごす。
　＊ただ単純に過ごすのではなく、一人になっている子はいないか、危ないことはしていないかなど、常に周りの状況に気を配ることが必要。
・子どもたちの帰った後の片づけ
・スタッフ全員で今日の気付いたこと、危なかったことの振り返りを実施

学内実習

**実習の準備として、
ゆにこ管理責任者からは、オリエンテーションを受け、子どもたちの個別支援計画について指導を受けました。**

**ゆにこに通う子供の保護者の方から、お子さんや自身の思いについてお話を聞きました。
お子さんの障害が分かった時のこと、子育ての不安・葛藤、周りの方の支援、制度面に期待すること、我が子への思い等お子さんと交流するだけでは知りえなかったことを伝えていただきました。
1人の子供が大切に育てられているという事その素晴らしさ、命の尊さを学ぶ良い機会となりました。**

障害をもつ人との共生社会について



実習に参加して

実習の初めは「大変そう」という気持ちもあったが、家族、学校、施設での連携が取れており知識のある先生方がいる環境は利用者にとっても私たちにとっても信頼できる場所だった。

短期間でも利用者の成長を感じた

実習期間は2ケ月という短期間だったが子供たちのなにかを達成する瞬間や、新しく何かができるようになった場面に遭遇することができた。

コミュニケーション

コミュニケーションと聞くと言葉を連想していたが、同じ遊びや活動を通してもコミュニケーションがとれることがわかった。

声のかけ方ひとつで気持ちを変えられる

次の行動を促すときや、注意をするときに相手の性格や長所、特性を生かした言葉がけをすることで、相手の気持ちの切り替え具合やその後の行動が順調にいく。

→利用者の性格、特性、得意不得意、好きなこと、苦手なことを把握しているからこそできること。

障害を持っているからといって個性がないことは決してない

むしろ個性の塊！

障害を持っている方と関わることは自分自身の考え方が変わるきっかけにもなる！

自治体を PR してみる！

担当教員：岸本文利

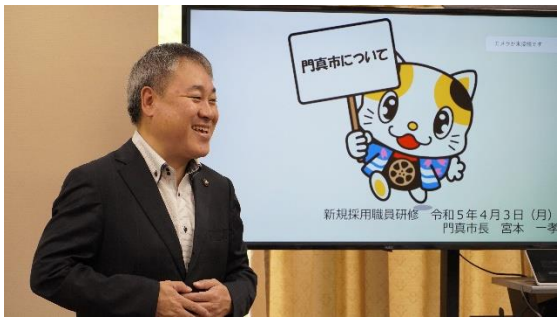
（1）取り組みの趣旨・目的

映像で自治体を PR する事を通じて、PR の本質を知る。どうすれば多くの人に見てもらえるか、どうすれば共感できる映像コンテンツを製作できるかを実習を通じて知る。また、取材することは、交渉を通じて相手のとの信頼関係をいかに構築するかが重要であり、それがユニークな面白いコンテンツ制作の原点であることを理解してもらう。

（2）2023 年度の取り組みの紹介

1 年目の受講生は大阪府門真市の PR コンテンツを制作し、2 年目以上の 4 名と 1 年目の 4 名の受講生は滋賀県高島市の棚田の PR コンテンツ制作にあたった。門真市プロジェクトでは受講生 12 名が 6 本の動画コンテンツを制作。以下、6 本の作品タイトル。中国の留学生が 2 名入ったことで中国語の字幕を入れて中国の方にも見てもらえるようにした。
@関西フィルの昼ご飯！（門真市拠点の関西フィルハーモニーを PR）
@門真市のパワースポットを紹介（門真市の神社巡り）
@門真市の和菓子屋さんをチェック！
@門真市の秘境？（門真市の銭湯を紹介）
@門真市の珍自動販売機（中国留学生が中国語字幕、さらに中国との比較をおこなった）
@中国人留学生が見た門真市！（中国留学生が門真市を歩いて中国とトイレなどを比較・中国語字幕も）

昨年度同様、2024 年 4 月以降、門真市のホームページで順次アップされる予定。
また、高島市棚田 PR プロジェクトは地元の協力を得て YouTube 用 2 本、TikTok 用 4 本を制作。地元と相談の上、4 月以降随時アップする予定。



（3）2023 年度の取り組みの成果と課題

門真市のプロジェクトでは、門真市と龍谷大学のコラボで PR 動画を制作している事が地元の河内新聞に取り上げられた他、門真市の市議会議員から「(動画を）楽しみにしています」と言われた事を広報が非常に喜んでいた。数年にわたって動画を制作していることが、門真市役所だけでなく市議会でも評価されている事を感じる。

棚田プロジェクトは高島市のバックアップが外れた事で、駅からの交通手段が公共バスに限られ、交通の便が極めて悪くなった。しかし、地元からは評価されているので引き続き PR 動画を制作していく方針。また地元の協力でドローン撮影が可能になった事から受講生がドローンで撮影した動画のコンテンツも今回初めてアップする事になる。

ただ、2023 年度も門真市での PR コンテンツについては編集が大幅に遅れた事から授業終了後も門真市から指摘された修正箇所の編集作業などがずれ込む結果となった。自宅で編集ができるはずだったが、実習サポート室の編集ソフトが入った貸出し PC が古く、編集ができなかったことから編集作業が学校でおこなわざるをえなくなり受講生の編集に支障が出た。受講生の負担が極めて重く、学生から苦情が出ている事から来年度は自宅でも編集作業がおこなえるよう PC の新規購入か、編集ソフトの購入を許可できるか、いずれかの改善を強く求める。

（4）受講生の感想

十塚　奈津

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

・カメラを撮影するまでにかなり時間がかかった事。
撮影交渉が思ったより大変だった。「このワンシーンを撮りたい！」と思っても、それを撮るまでに大人相手に交渉をおこなわなければならなかった事が本当に大変だった。

・言葉の壁
留学生とチームを組んでの制作だったため、言葉の微妙なニュアンスの違いから意思疎通が上手くいかない事が多かった。しかし、留学生しか持っていないような感性やアイデアに助けられることも多かった。

② 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

企画テーマの門真市の自販機に珍しいものや面白いものがある事を友人に話したら、門真市にわざわざ見に行った友人がいたこと。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

外部の人や企業と連携しながらひとつの動画を制作する事の難しさと達成感を体験できたこと。

大学生だけが作っているのではなく、門真市という自治体や DyDo という企業と連携しているからこそ、中途半端なものは作れない。撮影させてもらった自販機の企業秘密の部分をモザイク処理などで隠したり、著作権の問題等、公式に門真市の YouTube チャンネルにアップされるからこそ注意する必要があった。何度も何度も修正を重ね、大変だったし、しんどかったが、その分達成感はものすごかった。

発信情報

WEB

龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ

ＵＲＬ：　http：//www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

メディア

① 2023（令和 5）年 5 月 15 日（月）　／河内新聞（この記事は河内新聞の許諾を得て掲載しています）

龍谷大学生が門真市役所PR動画を制作

龍谷大学生が門真市と連携し、門真市役所PR動画を7本製作した。

◀動画（第1弾）QRコード

門真市役所PR動画

制作は龍谷大学社会学部社会共生実習「自治体をPRしてみる！」の授業の一環で学生たちが自ら門真市について調べ、取材・撮影・編集したもの。学生目線で制作されているため、より身近に門真市の魅力が感じられる出来栄えとなっている。

制作に携わった社会学部3年生の林真木さんは、「企画設定から撮影、編集まで一人で行うことはとても大変でしたが、制作を通して、PRには〝視聴者の共感を得る〟ことが重要だと分かった。門真市や関西フィルに親近感を持っていただければ嬉しい」と。同3年生の春木大河さんは「取材許可や著作権など様々な制限があり、自由に何でもできるというわけにいかない事がよく分かった。またどのように表現すれば伝わるのか、工夫することが大変で、思っていた以上に伝えるに苦労したと感想を述べた。

動画は5月1日より毎週月曜日に1本づつ「YouTubeの門真市公式チャンネル」で公開されている。

【第1弾】5分ちょっとでわかる門真市役所
5月1日（月）公開

【第2弾】門真マイスター認定企業～鈴木刺繍株式会社
5月8日（月）公開予定

【第3弾】門真市を歩いて縦断してみた
5月15日（月）公開予定

【第4弾】関西フィルハーモニー管弦楽団の魅力に迫る
5月22日（月）公開予定

【第5弾】公民連携子どもの居場所＝子どもLOBBY
5月29日（月）公開予定

【第6弾】子どもLOBBYキャリア教育イベント
6月5日（月）公開予定

【第7弾】門真市とちゃうか？！
6月12日（月）公開予定

②2023（令和 5）年 8 月 28 日（月）　／京都新聞（この記事は京都新聞の許諾を得て掲載しています）

西本願寺唐門の前で写真を撮る高校生（京都市下京区）

高校生 寺院風景パチリ

下京・龍大生 接点づくりフォトラリー

高校生らが寺院を巡る「ご縁で繋がるフォトラリー」が27日、京都市下京区の龍谷大大宮キャンパス周辺で開かれた。参加者は、夏空の下で一帯を散策し、寺院の風景をカメラに収めていた。

地域連携を学ぶ授業の一環で、寺院と若者の接点をつくろうと学生が企画。同キャンパスで行われた受験生向けの学校説明会に合わせて実施した。

参加者は、大学創設の地である西本願寺の「唐門」（国宝）や和洋の意匠が特徴的な関連施設「本願寺伝道院」（重要文化財）などを撮影し、ゴールの一念寺（下京区）で景品を受け取っていた。

高校の同級生という田村颯空さん（16）＝兵庫県尼崎市＝と、篠原陽飛さん（17）＝宝塚市＝は「普段親しみのない場所を訪れる機会になり、新鮮でした」と笑顔を見せていた。（宇都寿）

③2023（令和 5）年 12 月 17 日（日） ／京都新聞（この記事は京都新聞の許諾を得て掲載しています）

「男の料理」高齢男性挑む

高齢男性が学生のサポートを受けて調理に挑む催し「男の料理クラブ」が16日、大津市中央２丁目の中央市民センターで開かれた。60～80代の男性６人が多彩なおかず６品を仕上げ、会話も楽しみながら力作メニューに舌鼓を打った。

大津で催し 授業の一環で龍大生サポート

上ギョーザの皮を包む男の料理クラブの参加者たち（大津市中央2丁目・中央市民センター）＝龍谷大提供
下完成した料理を味わう参加者たち

龍谷大社会学部の地域連携をテーマにした授業の一環。学生たちが同市中央学区で課題の聞き取りを行う中で、定年退職後の男性は地域社会とのつながりが希薄なことに着目。「地域デビュー」や家庭での自立を後押ししようと、料理イベントを企画した。

同学部2～4年の4人が初心者でも作りやすいメニューを考え、この日は近くのスーパーで買い物からスタート。同学区女性会の西垣眞智子会長も“助っ人”で加わり、参加者たちはゴボウのささがきの仕方やキノコ類の扱いなど助言を受け、きんぴらごぼうやギョーザ、エノキバターなどを完成させた。

全員で出来たてを味わい、「本当においしい」「みんなでやるからできた」と声を弾ませた。学生リーダーの同学部4年田崎秀斗さん(22)は「予定どおりスムーズで、スタートとしてとても良かった。今回の料理の経験を家でも生かしていただきたい」と語った。

買い物や料理を普段しないという岩﨑博さん(66)＝同市中央3丁目＝は、厚揚げの豚肉巻きなどを担当。「自分で作ったものは愛着も湧いて思った以上においしく、料理を通してコミュニケーションも取れた。準備から後片付けまで手間がかかることがよく分かったし、妻には感謝したい」と笑みをのぞかせた。男の料理クラブは今後も月1回開催する予定。（堤冬樹）

「手間かかる 妻に感謝」

④2023（令和 5）年 12 月 17 日（日） ／中日新聞（この記事は中日新聞の許諾を得て掲載しています）

60歳以上の男性がギョーザ作り挑戦

大津で龍谷大生と

定年退職後に社会とのつながりを持ち続けるきっかけにしてもらおうと、60歳以上の男性向け料理クラブが16日、大津市中央の市中央公民館で開かれた。

地域課題の解決を目指す龍谷大社会学部の授業の一環。2～4年生の4人が4月から準備を重ねてきた。

大津市中央学区の6人が参加し、学生と一緒にギョーザや厚揚げの肉巻き作りに挑戦。調理経験の少ない参加者も多かったが、材料決め、買い物、調理、味見、片付けまでを体験した。

4年の田崎秀斗さん(22)は「開催までに地域課題の現状把握や、料理のメニュー決めなどが大変だった」と振り返った。参加した安孫子邦夫さん(76)は「ゆくゆくは料理を通じた社会や福祉への貢献にもつながれば」と話した。（和泉萌花）

ギョーザ作りの材料を確認する参加者＝大津市中央の市中央公民館で

⑤2023（令和 5）年 8 月 7 日（月） ／MBS テレビ「なんちゃって TV」にて放映

龍谷大学 社会学部
2023 年度 社会共生実習 活動報告書

2024 年 3 月　発行
発行元　龍谷大学 社会学部
住所：〒520-2194　滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1 番 5
TEL：077-543-7760 FAX：077-543-7615
E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp URL：
https://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/

公式Webサイト

公式X

公式Instagram

公式Facebook

龍谷大学 社会学部 社会共生実習の
公式 Web サイト ・ 公式 SNS では
最新の情報を随時更新しています！